奥州秀衡遺跡爭論

伽羅先代萩

地 天地の。開け始めし昔より。水フシカ、リ今に變らぬ妹と背の小オクリ契りの。末の樂しみは。女夫暮しの世帶事。長地手鍋提げるが眞實の。誠の戀の。睦言や。詞五十四郡の御主。冠者太郎義綱公。今日吉辰の。宿這入。オロシ都離れし航岡の。山の麓に手を盡し綺羅を。磨きし葛屋ぶき オクリ勝手。賑ふ客まうけ。島原に名も高尾とて。盛りあらそふ太夫職。手づから炊ぐ。白水も。流れの粹なフシ褄がけ。地 御大將は俎板に。フシカ、りきさむ鱠も五分切りの。國分煙草を禿の楓。お氣が盡けうと長ぎせる。詞ホ、コリヤよう氣が付いた。コレ太夫。イヤこちの女房ども。そなたもさつきにから米洗うて。定めて肩がつかよう。マア〳〵一休みしたがよい。アイ〳〵 地 私より殿樣の仕付けもなされぬ切りきさみ。嘸ぞお肩が痛みませう。詞よつ程久しう洗うたりや是で大方よいであろ。是からお粥をしかけうと。地いふに楓が小利口に。二人して舁く米炊桶。二つ並に金の釜。玉を。のべたる玉だすき。伽羅割よりも持たぬ手に。割木の刺もいた〳〵し。奥より幇間。フシ遣手の夏。詞ヤレ〳〵お二人樣ながら嘸ぞお嬉しうござりませうな。サア此樣にお目出たう。宿這入の御祝儀に呼ばれるといふ事は。ほんに〳〵此頓吉幇間冥加に叶うたといふ物なうお夏。アイ私も大勢の太夫樣方を廻したれど。此樣に内方へ來るといふはこれが始り。だん〳〵とお居くろめなされて。お二人の中に和子樣も出來る樣。アヽイヤ申し太夫樣。釜の下がきつう燻るぞえ。そして何ちややら無性に好い匂ひが。ドレ〳〵どうでよう燒きはさんすまい。ソレ其火吹竹といふ物を。テモ堅い木ちやコレ頓吉樣見やしやんせ。ヤアこりや堅い筈ちや伽羅の節木ちや。ハヽどうでもお大名の宿這入は違うた物ちや。極樂世界と喜見城。かの唐土の阿房宮。三千世界にあるとあらゆる結構づくしを集めても。又とあるまいさし向ひ。大方粥は金色の。地子菩薩の世話事床がため。御新宅の地形がため。ヤア目出た〳〵の若松樣よ。枝も榮える葉も茂る。お目出たいいよのお目出たい。千秋萬歲〳〵萬々歲。詞ハヽ、コリヤ頓吉目出たい〳〵。皆知つてゐる通り。この高尾が突出しから逢ひかゝつて。毎晩毎晩通ひ詰める此義綱。せまい廓の居續にとんと氣がつまり切り。どうぞ氣の變つ

た事がしたいと思ふ内。アノ錦戸刑部といふは誠はおれが伯父なれど。今では家老同然。流石血筋程あつて顔に似合はぬ粋親仁。此様に家を建て太夫とおれとたつた二人。百姓といふ者の眞似をして。大名事は忘れてしまへと。あれが勸めにこゝへ引越し。わいらをお客におれが料理。太夫も今朝から精出して。米洗うたり粥炊いたり。ヤモ大抵面白い事ぢやない。こんな事なら疾うから百姓になるものを。何の因果で大名に生れた事ぢや。マア第一何を言付けても。ハア／＼というて何一つ無いといふ事のないその不自由さ。女子どもは女子どもで曲輪の張とは違うて。こゝへ來い。ハア帶解けハア。足上げいハアと此様に思ふ様に物事が行ては。モ世に生きてゐる甲斐はない。ヤほんに客人達も嘸ぞ退屈。ソレ太夫。家渡り粥が出來たらお客方を奥の間へおりや膳立と何事も。地珍らし盛りたわいなく。そんなら奥でお祝ひ申さう。サア／＼こちへと打連れて。オタリ奥の〻座敷へ入りにける。地折から表賑ひて。歌かの船岡の／＼。アレハサノ宿這入の門にイみて。アレハサノお目出たいやんらお目出たい。ヨヲイヨイヨヲイヨイ／＼ヨヲイ／＼アレハサノエ。ヨヲイトコナ。アレハサノエ。ヨイトコエ。コレハサノエ。／＼ヨイコノエイヤラナ。／＼。もしも山の手の天から大事の小娘が。落ちたら喧嘩になるまいか。ヨヲイヨイトコナ。よい／＼よいやな。地聲も揃への染頭巾。坂道を押す大八車。門口に引付けて。詞御新宅の御祝儀に一つ締めましよ。よい／＼。モ一つせいヨイ／＼。祝うて三度ヨイ／＼ノヨイ。地滅多無性に目出たがる。顔は錦戸。ヤア刑部か。詞珍らしいしやれ姿跡なは荒灘氣之助。車に乘せたはアリヤ何ぢや。今日殿様高尾様。御宿這入の御壽。刑部様より御家見。車に積みしは金子の箱。お心付いたる御音物。ソレ／＼内へ舁き入れよ。地はつと皆々立寄つて數も限らぬ千兩箱。積み上げ／＼上板もクシしわるばかりに並べ置く。地義綱公は打詠め。詞ムヽ粹な刑部が進物なら。何ぞ面白い器物であろと。楽しんで居たに金子の箱とは。ムヽマア見た所が面白うもない物。アリヤマア何の役に立つ物ぢやと。地不興に刑部兩手を突き。詞ハ御誕生あつてより外を御存じなき御身。御不審は御尤も。某がお勸め申す。今日只今百姓とお成りなさるれば。只今までとは違ひ殿と高尾殿とお二人にて。世帶方をなされねばならぬ。其世帶と申すには。いらで叶はぬ物は金。掛屋方へ申付け。アノ箱の中に千兩づつ。金高は三萬兩。サア其様にいうても。其

金とやらいふ物を。どうするのぢや合點が行かぬ。イヤ其儀は荒灘めが申上げ奉らん。何事も御存じなき御殿樣。今までは御家老方。お小姓近習用人なんど。あまた役人承り。何から何まで致せども。是からは御自身に世帶方をなされにやならぬ。先づ第一の立物は米。これも今日より米屋と申す者の方へ。太夫樣でもお出でなされ。かの米屋より五升でも一斗でも。かますといふ物に入れて持つて參る。それを飯に拵へるには。薪と申す物を使はにやならぬ。其薪屋にて。和らか炭一俵。是は早く火がおこり。女中方には調法な物。それより味噌塩醤油。現金では扨せはしいもの。そこで是を置替と申す物に呑込ませ。先づ千兩箱一つ二つ。先々へ預けて置き。それからお二人差向ひで。遊んでは食ひ。食うては遊び。うか〳〵とする內に。三十日といふ恐しい物が來ると。書き出しと云ふ物を持つて。常は笑顏のよい親仁が。其日は急にこはい面。其時にアレアノ金箱。其儘では遣はれぬ。四文錢といふ物に取りかへて。さらり〳〵と拂うてしまふ。又金がない時には。質といふ物を置かねばならぬ。是が又重寶なもの。代物を持つて行くと。錢でも金でも二朱銀でも。望み次第に換へておこす。アヽまて〳〵荒灘。大概は承知したが。今の質の所が大分面白い。アノ金を早う皆にして。其質が早うして見たい。が又何にもなうなつたりや。イヤ其時は此刑部が掛屋方へ申付け。何萬兩でも差上げる。ハテナ。金といふ物は澤山にある物ぢやなア。モウ遣ひやうは覺えた〳〵。マア今いうた米や薪。そして味噌塩とやらいふ物。荒灘ちよつと買うて見せい。ハヽ畏り奉る。ハヽ白米壹斗薪四五把。和らか炭一俵。此直段が斯うと千兩ぐらゐであろう。イザ家來中手分けして。追付け買うて參らんと金箱かたげ立出づる。家來が締める草鞋のはるかのフシ里へと出でて行く。すれ違うたるまかい道フシそれ者と見える本田わげ。一つに合はす裏襟も黑い顏付き三浦屋才助。うろ〳〵見廻す門の口。ちと物がお尋ぬ申したい。もしこゝらに冠者太郎義綱樣といふ。お大名の店越はござりませぬか。ヤア太夫か。ヲヽ才助ようお出で。ヤ義樣もそれにござるか。ホホ高尾が親方。何と思うて。エヽ何と思うてとは。お前は〳〵滅相なお方ぢや。此親方にも得心させず。禿遣手まで引連れて大門へも斷り無し。行方が知れぬ故。こちの內は上を下へとまぜかへす中に。さる方から高尾を身請け。言うて來ても肝心の。玉が知れぬで方々へ。尋ね歩く此才助。サア〳〵高尾早う來い。但しは高

尾が身請金。今請取れば言分なし。あちらへ遣らうか。金渡すかサア〳〵どうぢやと 地高聲はお定りなる フシ臺詞なり。 詞コリヤ才助。わが言ふ事はとんと分らぬ。高尾はおれと宿這入りしたれば。どつこいもやる事ならぬ。サアそんなら身請けなさるゝか。ヤ其身請けとは何の事ぢや。サア身請けといふは太夫が身の代。サア其身の代とは。エヽ合點の悪い。コレ太夫を爰に置きたくば。金を此才助にお渡しなされと申す事。ムヽ金か。初めからさういへば濟む事を。ソレ其積んである金を。望み次第に持つて去ねと。 地仰せに見附ける千兩箱ヤア〳〵〳〵。世は末世に及んでも有る處には有る物ぢやな。したがあんまり金過ぎて値の言ひ出し樣がない。エヽ斯うつソレヨ三百兩ではイヤ〳〵あんまり安い。六百兩かい六百兩では儲けが少い。いつそ飛んで千兩かエエそれでもどうやら安さうな。 地エヽコリヤどう言はうと目もろろ〳〵。金に噬せるぞフシ道理なり。刑部聲かけヤイ〳〵才助とやら。何をうろ〳〵。誰あらう冠者太郎義綱公の。御臺所に定まる高尾殿の身請け。いか程と極めては世間の聞え。それに積んだる千兩箱。其方が力次第。持たれるだけは持つて歸れと。言ふに才助なほ惚り。夢ではないか夢にでも。こんな嬉しい有難いコレナうまい事があるものか。たとへ腕は折れるとも。 詞存分取らいで 地おくべきかと オクリ薪の。繩切これ幸ひ。金箱手早やに七つ八つ。しつかとくゝり肩腰入れ。上げても〳〵。いつかな〳〵。爰らが男の辛抱と。總身の力を肩に入れ。心はやたけとはやれども次第次第に精根盡き息切れ。日眩ひ汗たら〳〵 詞エヽ扨も〳〵此樣な 地因果な事があるものか。寶の山へ入りながら持つ事ならぬは金持に。なられぬといふ證かと涙ながらにこつて〳〵。取りへぐ箱のうらめしく。殘り多げに漸うと一つ擡げる獨言ひよろ〳〵〳〵〳〵してぞ フシ立歸る。 詞ハヽヽヽても扨も弱いやつ。アヽ是ではまた減らし樣を工夫せずはなるまい。刑部も奥へ。太夫もおぢやと。 地うつかりおんくわの御大將。金花咲く陸奥を。心がけたる錦戸が。いざ御入りと打連れて オクリ奥のへ一間に入りにけり。 地山道も。都なればや和らかに。育ちがらなる風俗は オクリ十七八の角額 地貝田勘解由直勝が一子源之助。立派作りの大小も。 フシ角菱立てぬのつとり顏。跡に付添ふぼつとりは。伊達明衡が娘松島。夫婦といふは名ばかりのまだ盛り見ぬ脚蹋山。腰元家來はかたへに殘し。打連れ來る。庵の戸口。 詞申し〳〵源之助樣。道々も申す通り。殿樣の惰弱の御身持。

國にござる母様から御意見申し上げよと竊の文。男御様へ申上げても聞入れなく。御諫言もなされぬは。どう思召すお心やら餘り心ならぬ故。及ばずながら殿様へ御意見を申し上げうと思うても女の身。お前を楯に言ふ爲。最前から申した事。よう覺えなされましたかえ。ヤアムウイイヤ先にから言やつた事餘り長うて一つも覺えぬぞや。モウ大概な事なら覺えさせずとよしにしやいなう。エ、つんとモウ譯もない事ばかり。コレ最前から申した通り。アヽ待ちや〳〵むつかしい事ぢや故宙では覺えぬ。地コレたしなみ持つてゐると。鼻紙袋の石筆に。詞サア今一遍いうて聞かしや。サア殿様のお身持御放埒。アヽコレ〳〵其様に長ういふ事はない。筋ばかりで跡はおれが胸にある。マア一つ殿様の事さうしてから。サア館へもお歸りなく晝夜を分かぬ御放埒。ムムよしし御放埒の事。もう是でよい〳〵。大概心覺えは書いて置いた。サア〳〵早う内へ往なう。エ、又何をおつしやるぞいなう。殿の御目にもかゝらぬ先。内へ歸つてよい物かいな。アヽほんにさうぢやなう。コレ申し必ず〳〵行儀よう。地何にもお忘れなされなと フシ伴ひ這入る門の口 詞誰そお取次頼みましよと。地昔なふ聲に奥よりも。立出づる錦戸刑部。詞ムヽコレハ〳〵貝田の子息源之助。松島との夫婦連れ。扨は殿の御機嫌伺ひ。お出での様子某が後程宜しく披露せんと。地いへど答へもうつかりひよん。松島は氣の毒さ。詞コレ源之助様。刑部様へ御挨拶。それ早うおつしやりませ申し。地申しと氣を揉めば。詞ヤア挨拶とは何の事ぢや。エ、ほんにしん氣な事ではあるぞ。マア下へおすわりなされませ。それな行儀に兩手を疊へ突いて。ヲヽ呑込んだ〳〵と。地かしこまつて手をつかへ。詞エ、アノ何とやらエ、ヲヽそれ〳〵。地思ひ出したと懐より。以前の書付け取出し打詠め。詞エ、一つ殿様の事。ムヽ殿様が何と致した。エ、さうしてからアノ御放埒の事。何御放埒とは。シテ〳〵サ其跡は。ムヽ何やらであつたが。ヲヽソレ〳〵覺えぬ〳〵あら〳〵斯の如くなり。フシ ナウ松島と譯もなき。地傍には獨り氣をもむ松島。錦戸刑部苦笑ひ。詞ハヽハヽ、親に似ぬ發明人。何の事やら分らねど。御放埒といふからは殿へ御諫言との事ならん。こりや松島の附智慧であらう。其方の實父伊達明衛。國家老を鼻にかけ申越したに違ひはない。此刑部は別腹故家臣の列に加はれども。正しく義綱公の爲には現在の伯父。意見してよければ某が諫言する。いらざる女の忠義立て。早や歸りやれと傍若無人。地横紙破り

に松島も何と詞もフシなき折から地荒くれ男の天窓付仰反鞋も鉞にくゝり付けたる夏紅葉。遠慮會釋も門の口。ずつとフシ這入つて上り口。詞今日は爰に大金持の宿這入があつて。榮耀榮華のほたえ次第奢り次第と聞いた故。どうで薪でもついした物では賞れまいと。思ひ付いたコレ此紅葉。賞りに來た此男。サア買うて貰ひましよ買うて下んせと。地言ふもはるゝ事はないぞ。三度諫めて身退くと古語に引きかへ。百度千度の諫言も。傍に付添ふ侍人ばらめが。さゝい巨細言廻し剩へ御前を遠慮。やら腹立ちに妻子を連れ。四年以來浪人住居。聞くまいと思ふ程いよ〳〵聞える殿の放埒。其元は傾城め故。コレ此紅葉は高尾の名物。コレまつ此樣に打切つて仕舞ふが。主君の目覺ましお家の爲。寵愛の女を手にかけしと殿が腹を立てられうが。とんぼう返りしられうが。そこらは構はぬ源五兵衛。

一癖ある面付。錦戸きつと見。詞ヤアおのれは先年義綱公に諫言して。用ひなきを憤り。白晝に國を立退きし熊川源五兵衛。ム、聞えた浪人の糧に盡き家々をゆすり商賣。古への主とも知らず。百姓町人と心得慮外千萬。錦戸刑部が前とも言はず狂氣同然の尾籠者と。地きめ付くれどびくともせず。くつ〳〵と笑ひ出し。詞ヤアぬかしたり腹の皮。三千世界に主君がなければ怖い物のない此熊川。慮外と言國に殘る明衡定倉兩人が。知らず顏は知行が惜しさ。ヤモどいつもこいつも祿盜人めら。渴しても盜泉の水。おのれ等と一つに飲まぬ某。サア傾城めを此處へ出せ。留めだてすると相伴に此鉞で幹竹割。地病の根を切る一療治と不忠の良藥熊川がフシ苦い效驗ぞ手ひどけれ。詞ヤア言はして置けば樣々のたは言。地早や立歸れと引立つる。手先を掴んで引つかつぎ。眞逆樣につでんだう。もう赦されぬと刀の鯉口。ヤレ暫く待たれよ刑部殿。地熊川氏も早まられなと疾くより戸口に貝田勘解由。二人が中に分入つて。詞委細一々承る。熊川殿の忠節ハ、天晴〳〵。其方國元を出られてより。某竊に御諫言申せども。情なや御聞入れなき其許は。國に殘る明衡定倉この貝田を忌み嫌ひ。御前を遠退けんため奢りを勸め込み。用金を主君に當てがひ。稻妻郷助といふ筋無き者を御傍に付置き。御惰弱を勸むるは兩人が心に一物あらん。某御傍を放れなばいかなる珍事も出で來らん兎角時節を見合さんと。御心に入る事のみ御諫言も申さぬは。御傍を放れまい爲心を盡せども。モ誰あつて片腕とする忠臣なく。樣々心を痛める此時節。思はずも熊川殿此處へ來られしは。某が身の大慶此

上やあるべき。地是より兩人心を合せ。
侯人逆臣の奴輩一々追ひ退けんは我が方
寸の内にありハア、忝なや嬉しやと誠を
表す フシ忠義の詞。地源五兵衛も納得し。
詞ム、忠義の爲とお言やれば何國まで
も立て貰く熊川。定倉にもせよ明衡にも
せよ。逆意とあれば國へ立越え掴み殺す
に何の手間隙。地いで此儘に國元へとつ
つ立ち フシ上る性急者。詞アヽイヤ〳〵
急いては却つてお爲にならず。一先づ我
が家へお越しあれ諸事の密談。アヽイヤ
コレ〳〵勘解由。そりや何事向う見ずの
アノ熊川。こなたの屋敷へ連れ歸り密談
とは此刑部は呑込めぬ。イヤサ何事もこ
の貝田が。お家の爲に心を碎く仕上げは
跡にて。ヤア倅松島も諸共に熊川殿を御
供申せ早く〳〵。地と諫めの詞。心なら
ねど松島が。詞イザ御案内サア源之助様。
ムウもう往ぬのかヤレ〳〵ほつと退屈し
た。シタがあの強い人が出たのでどうや
らちつと氣が晴れた。地サア〳〵往なう
と先に立つ。詞ム、然らば貴殿のお屋敷
へ委細はあれでと地勘解由が式禮熊川は
フシ皆うち連れて出でて行く。地跡に錦戸
不思議の顏色。詞コレサ勘解由。かね〴〵
某と心を合せ。義綱を阿房に仕込み。忠
臣の奴輩に愛想つかさせ取つて押籠め。
鶴喜代に跡目を願ひ後見となつて一家中
を味方に附け。其上で鶴喜代を亡き者に
せんと日頃の計略。大概に出來かゝつた
所。忠義立てするアノ熊川ホヽウ取込ん
だ我が心は。殿の爲と誑しこみ。國にある
伊達泉兩人を片付けさせば。跡に氣ぶさ
いな者も無い五十四郡は心の儘。只何事
も我が胸にちつとも氣遣ひ地あられな
と。惡事に固まる詞の下。宙を飛んで稻
妻鄕助 フシ息をはかりに駈來り 地斯く
と見るより兩手を突き。詞ヤア御兩人共
是に御入り。殿樣の御用あつてお館へ參
りし所何かは知らず國元より早馬。早駕
籠上を下。何分殿樣が御座なくてはと存
じ息を切つて立歸ると地言ふもひい〳〵
〳〵 フシすた〳〵息。詞ホウ出かした
〳〵。我々が御供は人の目立つは御爲な
らず。汝は館へ裏口より片時も早く御供
申せ。地早く〳〵に稻妻が。フシはつと
ばかりに奥の方。地折から歸る風之助錦
戸見るよりコリヤ荒灘。詞日頃言付け置
きしは愛。外に供なき冠者太郎。跡より追
付き道中にて人知れず討放せ。コリヤ必
ずぬかるな。地合點と風之助道を フシ早
めて追うて行く。かゝる所へ貝田が若黨
有村金助。色眞青に駈來り。詞若旦那を
御供し歸る麓の咀傳ひ。羽色餘鳥に異る
山鳥。人も恐れず岩の上。固よりあどな
き若旦那。手取りにせんとなされしに。
ぱつと立つたる跡を追ひ。山路へ追駈け

御入りあれどかいくれに行方知れず。松島様の御歎き過ちあつてはいかゞぞと。熊川殿にお頼み申し。數多の下部は手分けして。尋ぬる隙に右の様子お知らせ申さん爲暮に及ばゝ氣遣はしお旦那にも御出であれと ッシ言ひ捨てて駈り行く。地刑部も悔り貝田勘解由。詞心愚な我が伜古狼野子の所爲なるか。何にもせよ捨置かれず。地刑部殿には義綱の有無の音信相待たれよと駈出す心も夕陽の日影を追うてぞ。三重へかけり行く地岩間谷陰咲き揃ふ花踏みちらす韋駄天走り。我が子を尋ぬる氣はそゞろ ッシ駈け行く坂中地物こそ見ゆれと立寄り見れば。若黨金助のたれ伏したる骸は血まぶれ。見るよりくわつと怒りの眼。詞ヤア主に忠無き卑怯者と。地死骸を谷へはつたと蹴込み。詞必定猪狼の仕業ならん。たとへ天狗の所爲なりとも。大丈夫の一心に。何ぞ求め得ざるべき。峯を崩し水を穿つても我が子の敵。地微塵になさで置くべきかと。眼血走り氣は半亂駈け行くこなたの洞穴より。詞ヤア暫く貝田勘解由。汝を待つ事やゝ久し。對面せんと聲を掛け。地立出づる其形相。葺の髪を振亂し。身は白狼の革衣眉毛漏れ ッシ來る眼の光。詞ム、扨は家來を害し。伜源之助を奪ひしは汝が仕業よな。サア伜が生死白狀せよと。地はつたと白眼めばにつこと笑ひ。詞ホ、竹の林に住む虎は勢ひ猛きものなれど。我が子の別れを悲しみては。千里に功ある足痿えて。一歩を成す事能はずとや。さしもに勇なる貝田なれども。恩愛の道捨てがたき。心を計つて一子を取り。此山中へ釣り寄せしは。大望の片腕とも頼まん爲の我が計らひ。元某は常陸の大椽國香が末子。常陸之助國雄と言ふ者。汝が主人義綱は陸奥守秀衡が嫡孫。我が父國香は隣國にて。互に武威を爭ひて。地數度の合戦軍慮を磨き。軍に勝利の時もあり。又は敵の方便に乘り。詞味方追はるゝ折もあり。蝸牛の角の爭ひも。天の成せる運命は。いかなる猛將勇者なりとも。叶はぬ時節か地閣々と。秀衡が謀に思はぬ深入り伏兵ども。一度に起つて亂戰に。詞父を始め兄國光。宗徒の郎等一騎も殘らず討死と聞いたる時の我が無念。馳せ着いて父の仇。弔ひ軍せんものと。心ははやれど幼稚の某。頼みがたなき人心。恩顧の家來も皆。散り〳〵時節謀つて秀衡を。一太刀恨みん其爲に。跡を晦まし國を立退き。六十餘州を遍歴し。深山幽谷に身を凝らし。習ひ覺えし妖術幻術。魏の孟德を惱ませし左慈が傳ふる稀代の妙術。隱るゝ時は芥子にも入り。地また現はせば天地に跨り。心の儘に身を變じ。詞神變稀代心の儘。錦戸刑部と心

を合せ。國を奪はん汝が胸中。計り知つたる我が術にて。おびき寄せしも心を合せ。地秀衡が末孫を討つて亡父へ手向けん爲。勇猛智謀は汝に在り。我が妙術を添ふるならば龍に翼を生ずる如し。大望成就疑ひなしと。胸中見拔きし ッシ稀代の曲者。詞ホ、天晴なる汝が詞。我が大望を見透す上は何をか包まん。錦戸が巧みに與するは彼が權威を借らん爲。地事成就せば打殺し。五十四郡を手に握らば一天四海も一櫚み。詞冠者太郎が家に傳はる亂れ髪といふ一陽。疾くより奪ひ身を放さず。刀紛失の次第惰弱の身持ち。歸つて國へ通達すれば館の騷ぎの虚に乘つて。事を謀る方便は樣々ハ、、、地面白やと猛悪に。悅ぶ國雄も勇み立ちホ、、ホ心地よき强勇豪傑。詞返し與ふる源之助。子孫の榮え請取られよと。ッシ引立て出づる源之助。親の工みも夢現。別れ散つたる家來ども追々尋ね見付ける人影。詞ヤアお旦那是に若旦那と。地立寄る下部を拔打ちに右とッシ左へ踏飛ばし。詞怪しめられては事の破れ。只狼の雛に遭ひしと言ひふらすも。密事の血判。やがて再會々々と。地立別れたる深山路や。能はぬ望みは童に。花咲きまじる鄰蹋山我が家へこそは 三五へ立歸る

第二

地夜目にきらめく門構へ磨き立てたる金物の。紋も羽を伸す竹の丸冠者太郎義綱の上屋敷。用心嚴しき拍子木の音さへ澄みてッシしん〳〵たり。色と酒とに現なき身は空蟬のもぬけ殼。高尾が肩に義綱公もつれもつるゝ千鳥足。跡に付添ふ稻妻荒灘。門外近く立留り。詞申し殿樣。爰がもうお屋敷現ないお姿では御家來中の見る目も氣の毒。心をお付け遊ばせと。地いへどたわいもぶら〳〵眠り。詞アイヤ申し高尾樣。其樣に氣の毒がる事はない。假令どうなされうが。皆殿の御家來ばかり怖い者は一人もない。ドレ御門を開かせんと。地荒灘は門の戸びら。割れるばかりに打ちたゝき。詞殿樣只今御歸館なるぞ。御門を早く開かれいと。地言へどひつそと靜まつてッシ答へる人もなかりける。地荒灘はむくりを煮やし。詞コリヤヤイ是程にわめいても返事もせぬは寢入つて居るな。うぬらが役は何だと思ふ。御門の開閉するばかりで御扶持を食つて居るではないか。その殿の御歸館に。たわいもない寢とぼけめ等ど性根付けずは荒灘が門打碎いて御供せうか。獄道めらと 地どつてう聲俄に騷ぐ御門內さつと一度に高提灯はせ違ふ人音足音ッシ思ひがけなく表は悔り。地門內より聲高く。詞御門番は伊達ノ治郎明衡。仔

細あつて相勤むる所に。理不盡に門を開けなんどとは何者なるぞ。眞直ぐに名を名乘れと。地詞に仰天荒灘が。暴風に遭ひし心地にて皆々フシ答へもなかりけり。詞ム、聞えた京童のざれ深く。田舍武士とて嬲るよな。急度詮議もすべきなれど。一大事の評議最中其儘に打捨て置く。ヤア〳〵者ども御門を嚴しく相守れと。地聲諸共にしめる戸の。フシ貫木入れたる詞の錠。地稻妻は氣をいため。詞コレ〳〵荒灘。何にもせよ我が君を。館へ御入れ申さずば事の樣子が氣遣ひな。裏門から御供せん。イザ御出でと御手を取る地高尾も共に氣もそどろ裾もほら〳〵踏みかへす裏の御門へ〳〵急ぎ行くフシ廻れば道も遠目から。星をあざむく高提灯。畫かとばかり人々は只うつとりと詠めゐる。地鄕助は詮方なさ。御門の扉にひそ〳〵聲。詞此御門はどなたのお固め。義綱公御歸館なれども。表門は明衡殿お固め故御入り叶はず。何卒密かに此門より御入りある樣賴み入ると。地聲より早く高塀よりずつと見越すは名も高き和泉小治郎定倉。詞ヤア義綱公の御歸館とは心得ず。此定倉が主君と申す。冠者太郎義綱公は五十四郡の御主。西に津島の冠者。東には伊達ノ冠者。靜謐の御代には國の固め。戰場に出馬の時は百萬騎の大將たり。それに何ぞや女童を引連れて。ム、コリヤ我が君を放埒なりと世間へ流布させん爲。惡人共のはからひよな。地錦戸貝田が知らせにてお家の重寶。亂れ髪の刀紛失と追々知らせ。必定逆意の者共が騷ぎに紛れ我が君の。御身の程も覺束なし。詞君は館に。あるとも。無きとも知れざるも又侯人ばらの心を探る一方便と。御門を固め此通り見れば足弱を連れし旅人と見ゆる。門前にうろついて人に見咎められぬ樣。早く立去れ〳〵と。地仔細ありげな定倉が。詞と共に門內もひつそと。フシ鎭まり音もなし。地人々案に相違して。スエテ心を痛むる其中に。寢ぼれ聲なる義綱公。詞御家老衆の例の堅み。大切がる此門も。島原の大門ほどには我等嬉しう思はぬ〳〵。イヤ又。出口は和らかみが格別。されば廓中先生達の御託宣に。唄都島原出口の柳。かそやれ〳〵此柳。サツサかそやれ此柳。詞なぞとやつた所はたまらぬ〳〵と。地現たわいもフシなかりけり。地隙を窺ひ荒灘が義綱目がけ拔き刀。日早く稻妻引きずりのけ。詞ハテ心得ぬ風之助。御主君を討ち奉る極惡人。コリヤうぬ誰ぞに賴まれたな。ヲ、知れた事賴まれたが。それを汝にいふものか。打放した跡で言うて聞かさう先づうぬからと地切込む刀。まつかせ合點と拔き合せ。打合ひ打合ふ白

刃と白刃。電光石火稲妻が手練に刀打落され。逃行く荒灘後袈裟 フシ二つになつて死してけり。地ホヽ天晴手柄と小治郎定倉。詞當座の褒美と。地投げこす一通 詞委細はそれに早や行けと。地詞は何かフシしら刃の血しぼ。地一先づ袈を高尾様。アイ〳〵〳〵とかいしよげに小褄引上げ我が夫の御手を引くもなまめける。姿の盛り花紅葉。タヽキカヽリ色にたわいも現なき君を伴ふ稲妻が忠義は今に 三重

第三

地謀計は一旦の利潤。神明町に一構へは貝田勘解由直勝が屋敷。義綱公の館の内分けて目に立つ華麗の造り。手を盡した る奥の間は。浮べる雲の金襖龍に翼の出頭は。フシ誰並ぶべくも見えざりけり。地ちよつと掃くのも四五人が。草臥れる程廣い間に狭い。女氣陰の間の。フシ奉公箒持ちながら 詞コレお綱。此様に朝から晩まで忙しいお屋敷が。廣い京にもありやせまい。実から近い北野様へ。一寸參る事さへ叶はぬ。ソレイノ忙しい中へ心も無う。錦戸刑部様が。三日にあげずお出でなされて。旦那様と囲ひの内。何やら二人さし向ひ。人にお隠しなさるゝはどうでろくな事ではあるまい。ヲヽろくでない事いはうならお館様はうか〳〵と傾城を買ひ過し。此間から行方が知れず。お大名の駈落でも。鎗長刀の持手は無し。お供の衆はあるまいし。マア危い事ぢやないかいなう。ホンニソレあぶない次手にこちの若旦那。船岡山の帰りがけ松島様におはぐれなされ。蓮臺野の片脇で。狼に取りまかれてござつたを。漸う連れましてお帰りなされた。しかし狼で仕合せ。アノマ美しい若旦那。狐などが取卷いたら跡が疵物になるなうおむつ。サレバイノ。どこに思ひ入れがあるか。熊川とやらいふ怖い顔な人に。狐が憑いてそぞろ言。それを祈り鎮めると狸の様な山伏が。憎てらしい高慢顔。地狐やら。狸やら狼やらであへかへす。詞狼より恐しい。旦那様のお目玉を。地貰はぬ様と段々に。掃除フシしながら次へ行く。地襖明けると摺足し。脇目もふらず源之助。長地屋敷の内もあぶ〳〵と苦は色かへぬ松島が。フシ跡に付添ひ立出づれば。詞隠れもない大名。太郎冠者あるかやい。ノヽ。來たか〳〵。コレお前にと言ふのぢやわいなう。エヽ覚えの悪い人。マア一度初手から仕直さう。サア〳〵早う立ちやいなう。アイ〳〵。そんならあとを致しませう。昨夕お前が行方なうおなりなされた其時に。はつと思うた悲しさと。お帰りなされた嬉しさと。地何やらかやらで持病の癪。ちつとの間お待ちなされ。お氣が盡

きたらお菓子でも。詞イヤ〳〵欲しうない構やんな。きつう癪が痛むなら灸をすゑてやらうかや。モ熱いが辛抱しやるかと。地言ふ顔つく〴〵打詠め。嬉しい今の其お詞。夫婦と思し召せばこそ。愚しいお心にもたんと案じて。フシ下さんす。思ひ出すも味氣ない。お父様と父様が言ひ約束の無い先から。私が心に極めた殿御。女冥加に叶うたのぢやと。思ふ内早や睦び月。祝言をして程もなう健忘とやらいふ病。神や佛のお力で御本復は遊ばしても。御一門のお出會に。つまらぬ事をおつしやる度。おいとしいやら。悲しいやら。此後とても侮られ。住む甲斐も無いお身の上。思ひやられて悲しいと スエチ悔み涙の。折からに。地奥よりしづ〳〵出で來るは明衡が一子千賀之助。立派に出立つ フシ旅裝束。地松島見るより是は〳〵。詞直様お立ち遊ばすか。此頃何かに取紛れ問はせの文も認めず。國では兄弟同然に仲の好かつた文字摺様。お前がお迎へ遊ばせば私が爲には大事の姉様。どなた様へもお前から。いかにも〳〵。誰々へも宜きに傳へん。源之助殿にも御堅固にと。地いへどうつかり氣の毒を。紛らす松島勝手口。フシ連れて見送り出でて行く。詞サア是からおれが一人遊び。鼓も太鼓も笑にあると。地習うた事は奇特にも。鼓取上げ聲張り上げ。謡抑も是は桓武天皇九代の後胤。平の知盛。幽靈なり。ナホス詞ハア、わしが好きの強い伯父様が出てござつた。コリヤ面白い〳〵。謡打物業にて叶ふまじと。珠數さら〳〵と ナホスコハリ押し揉んで。跡より出づる奇妙院。謡いかなる天魔鬼神なりとも。ナホス地祈り伏せんずフシ眼付き。地きよろ〳〵目して熊川が。何を聞いてか高笑ひ。詞ハ、ヽ、ヽコリヤをかしい〳〵。日頃堅い額してゐる。六條の左近殿が。聖護院のお辰女郎を嫁に取る。コリヤ取持ちに行かずばなるまい。地先づ。盃は三々九度。祝儀も濟んで床の内。しめてからみし藤の森。松の千年と契りしを。小女郎が聞いて悋氣の燒餅一つ參れ兵衛殿。ま一つ參れ兵衛殿。詞ヤア伯父様その餅食たか。エ、汚な。三下り唄北野を過ぎて柏野や。思ひ内野にあればこそ。つめつた跡の紫野。後は互に睦言の。未來を契る連臺野。小褄引上げ引きしめて。裾はひら〳〵平野の宮へ。思ひなん〳〵七野の社。緣を切れとは。ナホス詞エ、胴欲ちやナ。地わしや何ぼでも離りやせぬ。殺して置いて行かしやんせと。泣いつ。笑ひつ現なくとんと。フシ倒れて高鼾。地奇妙院は一心不亂祈れど驗あらざれば。源之助は精盡かし。詞エ、鈍な山伏ぢや。二人面白う遊ぶのに。おのれが邪魔を仕をるので。伯父様も

つい寢入つた。サア〳〵とつとと歸れ〳〵。イヽヤ歸るまい。貝田殿の賴みによつて。此病人を本性にする。若輩者の知る事ならず。默つて居ろと睨め付ける。ワアイ病人を癒すはお醫者樣ぢやわい。わいらがそんな事したてて一つも効く事ぢやない。邪魔になる早う歸れ。シヤ小癪なる素丁稚め。某が術を以て空飛ぶ鳥も祈り落す。世事に分らぬ大馬鹿に言ひ聞かすには及ばねども。刑部殿の賴みにより。義綱の曲輪通ひ。伽羅の下駄に呪詛の文を書き服かせたる故にこそ。眞心蕩けて本性なし。まつた是を癒さんには。懷中したる祕書の一卷。此中に一つの良藥。是を呑ませば義綱も。元の通りに正しくなる。かく萬事に亘る某。魑魅魍魎を退けんは。掌をもつて大地を打つよりいと易し。地イデ〳〵驗を見せんとて又薊高を押しもめば。源之助は撥押取り。謳今の蛇身を祈る上は。何の恨みかあり明の。撞鐘こそ。すは〳〵動くぞ祈れたゞ〳〵。引くや手々に千手の陀羅尼。不動の慈救の偈。明王の火焰の黑煙を立ててぞ祈りける。ナホス地祈り祈られ源五兵衞。恐しや幣帛に。三十番神まし〳〵て魍魎鬼神は穢はしや出でよ〳〵と責め給ふぞや。アラ腹立ちや苦しやと。奇妙院が首筋摑み座敷へどうど投付けて。覆ひ重る肥滿のからだ大山を負うたる如く指を屈めん樣もなくフシカヽリ苦しむ内に。聲高く。謳尋ねても〳〵。此上嵐の雲に乘りて。龍女は南方に飛去り行けば。龍神は猿澤の池の青波蹴立てナホス蹴立てて地滅多無性に踏付けられ。目口を張つて奇妙院。フシ其儘息は絶えにけり。詞サア〳〵是からはおれが居間。其山伏を人形にして遊ばうではあるまいかと。地言ふ内よりも死骸をさし上げ。詞中の〳〵の小法師はなぜ背が低いぞ。まつかう高いわ〳〵。地氣の拔けたのと氣違ひと。誰に心もおくの オクリ間の襖へ押明け入りにけり地斯くと樣子もしろ書院。入來る渡會銀兵衞大場道益伴ひて。フシ座敷へ直れば。地それと案内に貝田勘解由。詞ホヽ渡會殿御大儀千萬。シテかの一品は調ひましたかな。ハアいかにも〳〵。委細とつくと此道益老に相賴み。事成就の後には新地千石。證人はこの銀兵衞則ち證文も渡し置く。ナニ道益老。最前お賴み申した通り調合のかの毒藥。勘解由殿へお渡しあれと。地指圖に道益近く摺寄り。詞お賴みのかの毒藥は我等が家に傳はる祕法。醫の道は仁術にて。人の命を斷つ事は醫家には固き禁めなれども。國の爲との御事故調合は致せども。先づ何人にこの藥御用ひなさるゝや。地承つて上の事といふかる顏色。詞ホ尤の尋ね。國

の爲家の爲。其毒藥を用ゆるは若殿鶴喜代君。エヽとは又何故。ヲヽ錦戸刑部殿に此家國を横領させ。我々も諸共に國郡の主と成り。榮耀榮花をせん計略。スリヤ銘々が國の爲さ。ナニ鶴喜代君に毒藥とはお國を亂さん國賊共。長袖なれども忠義は忘れぬ大場道益。知行にほだされ非義非道に與せんや。槌襪はしき奴輩とく。槌跡に勘解由は血押拭ひ。死骸片手に蹴上げる壘。さあらぬ體に傍へなる。暫時も同席勿體なやと。つつ立上るを銀兵衛が立ち塞がつてどこへ〳〵。詞大事を聞かせ歸さうやと。槌留めてもいつかな一徹老人貝田が抜打ち後袈裟。すぐに止めの。フシ一巻ぐり。詞ア、時代に合はぬ忠義立て。たとへ得心したとても打放さでは後日の難と。槌懐中さがし取出す包。詞コレサ銀兵衛。此一包は貴殿に渡す。豫てしめし合せし通り。ナソレ早く〳〵。ハア委細承知仕る。槌追付け吉左右お知らせと フシ館をさして駈り行

嫁そちや先程よりそこに居るか。何ぞ樣子を聞いたか見たか。イヽエ。何にも。ムヽ、知らぬぢやまで。イヤナニ松島。今朝より何かと用事繁くぽつとりと退屈した。幸ひの釜の沸りそちが手前で薄茶一服。槌點ててくりやれと底意ある。舅の詞松島が。立寄る振の紅の。朱を奪ふや。紫の。服紗さばきもしをらしく。本フシカカリフシ點つる茶筌の泡よりも。先へ消え行く命とは。心も付かず氣も付かず。行儀正しく フシ差出す。槌茶椀取上げ貝田勘解由とつくと詠め。詞ムヽ、色も變ぜず。ちつとも怪しき體もなきは。ハテ奇妙の

秘法。ハア、嬉しやこの毒藥を膳部に加へ進めなば。鶴喜代は即時に落命。ハヽハヽ、槌心地よやと フシ高笑ひ。槌聞いて悔り松島が。心は千々に浮島や水に フシ漂ふ思ひなり。詞コリヤ松島。とてもの事に此薄茶。其方そこにて獨り服せい。エヽ。イヤサ驚く事はない。其方が父伊達明衡は義綱の一族。忠義立てする老耄め。鶴喜代を毒害しても刑部殿へ國の政道仰付けられなき内に。事露顯せば大望の妨げ。現在明衡が娘の其方。ヤモ生けて置いては夜が寢られぬ。樣子聞がうが聞くまいが。どうで助けぬそちが命。其毒藥を試みて。死んで見せるが舅へ孝行。槌サア呑め。くらへと舅の詞。思ひがけなき松島は。暫し スエテ途方に暮れけるが。槌漸うに フシ顏を上げ。槌明衡が娘の私。若君樣への毒害を。とゝ樣へ洩さうかと。思召してのお疑ひ。無理とはさら

さら存じませねど。姫御前の身は生れてより三界に家無しとやら。夫を神とも佛とも。大事にするが世の敎へ。其夫の父上樣眞實ほんの父樣より。御大切に思ふものたとへどうした事にもせよ。お身の御難になる事を。何の人に洩さうぞ。未練に命惜しいとも 地微塵思ひはせぬけれど。心に懸るは我が夫の愚しいお心故女夫といふは名ばかりに。つひに一度の添寢さへ。馴染む程なほ頑是ない。氣にも私を女房ちやと思うてござるがおいとしい。離れともない死にともない。何々の誓文で 詞人には言はぬ申しませぬ。 地命を助けて給はれと口說いつ泣いつ。伏しをがみ。伏拜む手に 詞雫つたふ涙の 地瀧津浪。岩に堰かるゝ フシ風情なり。 地かゝる所へ渡會銀兵衞色眞蒼に駈來れば。勘解由きつと見。 詞ヤア合點の行かぬ貴殿の顏色。首尾よく毒害しおふせしか。アア心許なし何と〳〵。されば〳〵。直ぐ樣館へ馳着きかの膳番にしめし合せ。膳部に殘らず毒を入れ。サア仕濟ませしと思ふ所に。イヤモウ 地よい事には寸善尺魔。 詞若殿の御手遊び枝珊瑚樹の鉢植が。微塵に割れしは心得ずと乳母政岡あやしめば。かの强力者の節之助。正しく毒に紛ひなし其賴人を白狀せよと。膳番川崎軍八が首筋摑んで手詰めの場所。 地遏老功の刑部殿急きにせいたる風情にて。軍八を眞二つ傍に居並ぶ近習小姓腰元茶道に至るまで。十人ばかり卽座に手討。白狀すべき手筋も切れ 地只今評議眞最中。いかが計らひ申さんやと。青息吐息 フシ訴ふれば。 地さしもの貝田も溜息つぎ。 詞エエ十が九つしおほせしに殘念々々。さりながら素早き刑部の計ひにて。詮議の根を斷つたるは天晴の働き。しかし。政岡松が枝なんど鶴喜代が傍を離れねば。事を計るに便なし。ガ其毒藥を見出せしは。外に逆意の者ありと思はせん計ひなりと。却つて彼等に雜題を言ひかけ。遠ざける謀計は刑部と兩人計らはれよ。暫時も猶豫なりがたし。早く〳〵に 地渡會は。又引つかへし フシ駈り行く。 詞嫁々コリヤ松島。斯くしおほせねば猶の事。いよ〳〵命は助けられぬ。覺悟して早く呑め。アイ。サア呑め。アイ。くらはぬか死女郎。サア。サア〳〵と 地おひ廻され。悲しさつらさ一世の瀨戸際。襖ぐわらりと源之助拔く手も見せず松島が。肩先ずつぱと切下ぐる。ウンとばかりにかつぱと伏す。血刀逆手に取直しぐつと突込む左手の肋。日頃に變る立派の覺悟。 フシ强氣の勘解由も惚り仰天。 地手負ひは苦しき顏振上げ。 詞日頃愚鈍の私が。かゝる有樣父上の御不審は御尤も。錦戸殿としめし合せ。勿體なくも主君を失ひ。國を奪は

ん御企ても。子孫の榮華にあらせん爲。地その朋しを鎭めん爲。いつぞやの大病を是幸ひと作り阿房。現なき身の行作も。主人を掠める冥罰は。俘に忽ち報いしと先非を悔いて本心に。お成りなさるゝ事もやと。詞心を付くれど此頃は。彌〳〵募る惡事の企て。父は子の爲に隱し。子は父の爲に隱すと。古語に引きかへ親と子の心々に隱しあふ。地不忠不義の御心。諫言せんにも情なや。詞明衡が娘松島。某が妻とすれば。女に引かされ大望の妨げなすかと思さんかと。地不便ながらもこの如く。手に掛けたるは女房の。緣に迷はぬ心の潔白。仕込みに仕込みし御企て。思ふ圖の外れしは。天道誠を照し給ふ。フシ是目前の。證ぞや。詞近き手本は船岡にて。鳥を取らんと眼前の。慾に迷ひて山深く。難に逢うたるまつその如く。地國郡の慾に耽り。我が身を忘れ深入し。終には御身を亡し給はん。淺ましや父の惡事の根本は。私と云ふ子故の間。その迷ひの根葉を斷つ我が。生害は先祖代々。傳はる貝田の家の苗字。汚さじものと一心に。思ひ込んだる孝の道。心の迷ひをふつつと切り。惡事を思ひ止つてたべと。孝と忠義と二つ三つ弱り行く身の松島が。扨はさうしたお心か。さうとは知らず今までも。御病氣故の現冒。どうぞ本復ある樣と爲の鳴かぬ日はあれど泣いて祈らぬ神樣や。佛樣まで御苦勞を懸けぬ願ひもなかりしに。今の立派なお詞を悅ぶ甲斐も情ないコレ。此お姿は何事ぞ。此世の緣は薄くとも。未來はやつぱり夫婦ぞやと。痛手も脉はず縋り付きいたはる息も。絶え〳〵に賴み。すくなきフシ其風情。地强惡不敵の貝田勘解由。詞ハハ、、、ハテほさいたり不孝者。子が死なうが親が死なうが。思ひ込んだる我が大望。いつかな〳〵翻さぬ。親に逆らう天罰にてくたばるは不孝の罰。思ひの儘に苦痛をひろげと。地二人をはつたと踏飛しフシ見返りもせず入りにける。地樣子とつくと物陰よりぬつと出でたる源五兵衞。詞貝田が胸中合點行かず事を謀らん其爲に。狂氣の體に何もかも聞き拔いたれば遁れぬ勘解由。地イデ一摑みと駈行く勢ひ。マア〳〵待つた源五兵衞殿と苦しき體取縋り。詞忠義に凝つたる貫殿とは。知つたる故に法印が。工みの次第あど打つて。白狀させしも我が父の。百分が一の罪亡し。地我も少しの忠義ぞや。詞主に叛く父勘解由果ては刄の錆屑と。なり給はんとは思へども。眼前親の憂き目をば。何と見て居られうぞ。地相果つるとも魂は。四十九日が其間。此土を去らぬと聞くなれば。死しても見ゆる我が悲しみ。せめて暫しが内なりとも父の命を延

べてたべコレ。今はの際の願ひぞや。コレ手を合す源五殿お情お慈悲と身を投伏し歎けば共に松島が。合す両手も弱々と今を限りの二人が體。孝心貞女の節義には。さしもに荒き熊川も。目をしばたゝき居たりしが。侯悪邪智の貝田が伜に。斯くも忠孝揃ひたる。天晴健氣の若者よな。親は子故に迷ひもせで子は親故に迷ひしよな。赦しがたき勘解由なれども汝が孝心厚きに免じ。けふの様子は何事も知らず覺えぬ氣違ひの。目にはこぼさぬ一雫。ハア、、、、、有難涙末期の水。引取る息も一時に哀れ。はかなき。フシ最期なり。地ほろりとこぼす勇者の涙。しをるる熊川庭先へ。貝田が下知にて數多の家來。ばら〳〵〳〵と追取り卷き。詞ヤア佯氣ちがひの源五兵衛。遁すなやらじと呼ばはつたり。詞ム、ハ、、、常の力に百倍増し。氣違ひ力の源五兵衛ならば手柄に留めて見よと。地庭へひらりと右左。捕つたと掛かるを引寄せ〳〵ばらり〳〵と。三重人礫地強力手練の働きに。コリヤ叶はぬと フシ皆ちり〳〵。地思ひがけなき後より頭目當に打付くる。釜の熱湯毒氣に噎び思はず尻居にどつかと伏す。透へ切込む貝田が刀受けたる強力手水鉢。微塵になさんと振上ぐる。さすがの貝田氣を呑まれ逃入る跡へ又むら〳〵。出合ふ大勢打付くる石に打たれて フシ人の鮪。地我が身もどうとふし〳〵に。染込む毒氣に眼も眩み。勇氣も碎け無念の齒がみ。詞エ、口惜しや殘念や。やみ〳〵と毒藥に。命を果すか奇怪や。此上は何千萬日本國が寄せくるとも死物狂ひのあばれ死。地敵の屋敷に我が屍。いつかな殘さぬ人種の。有らん限りと氣を固め踏出す。足もたぢ〳〵〳〵弱る両足踏みしめ〳〵。支ゆる奴ばらはりのけ蹴殺し踏殺し。人無き原を行く如く。萬夫不當の豪傑も運つきの輪や熊川が武勇の程こそ三重へゆゝしけれ

第四

地姫氏國と書きし寶誌こそ四百餘州の粹ならん。フシ何國はあれど。取分けて。都の水で磨き上げ娘盛りの品者が オクリ前垂れ 小オクリたすき。掛けまくも髪形さへ手品さへ。和らかさうな豆腐屋の。内を手傳ふ小息子が。 フシ水の垂るのを燒き立てる。地おかべ一重の隣には。何する人としら浪かしかとは見えぬ男振り。フシ されども此人糞をば何と烏羽玉の。夜ならで日覺め給はぬは。いと不審多き。すぎはひなり。地中間とも侍とも。わからぬ腰付せいひつ合羽。あたりうそ〳〵立止り。詞浮世渡平はこの宅なり。地在宿ならば御意得たし。詞ア、誰ぢや喧しい。

用があるなら明朝ごされ。ム、昨夜の義理を取りに來たのか晩には是非とも行く程に。其時に一所に濟すイヤ〳〵左樣の用事でなし。地自他共に御意得たし。詞是非逢ふ氣かそんなら其戸をぐつと押した。ア、コレ〳〵靜かにしようぞこぼれ物がどんすぞや。アリヤこそ淺瓶引つくり覆した。地麁相な人とぬつと出す顏はをかしう惡光り。素人の燒いた樂燒の中にぎろつく目を擦り〳〵。詞エ門兵衛樣さて愛じい降りでござります。そしてマア何ぞ用でもござりますか。ヲ、サ〳〵地密々の用事もあれば。內へ這入つて其樣子。詞イエ〳〵內は雨がだゝ拔け。外の方が增しでどんす。然らば是で申付けん。主人錦戸刑部殿其方へお賴みなされたきは餘の儀でもない。隣の豆腐屋は。傾城高尾が親里なれば。地冠者太郎諸共に尋ね來らんは必定其時には折を窺ひ人知れず二人共に刺殺し捨てられよ。此儀首尾よう仕おほせなば某が推擧して。侍に取立てる。詞斯樣の事を申付けるも。先日屋敷で博の節。二三度の出會に。地汝が魂見拔きし故偏に奉公勸まれよ。詞畏りました。スリヤ隣の豆腐屋は。ヲ、サ高尾が親里若しも尋ねて來まいものでもなし。來た時には。ハテ氣遣ひさんすな。貧乏搖ぎもさせませぬ。ハテさて小氣味のよい男。地然らば隨分手ぬかり無う。萬端貴殿を賴入る。詞近日ゆる〳〵御意得んと。詞は天晴萬石取り。腰に二腰さしこなす。銀拵へも胡散なる。なまりフシ散らしてかへりけり。詞ようお出でなされました。コレ屋敷によいのが出來たらかならず知らして貰ひましよぞえ。沙汰無しにしよまいぞえ。ア併しあいつも錢なしぢや。ちつと負けると小言ばかり。エ、あつたら夢を覺された。ま一寢入り見知らそと地入るよりはやく高鼾オクリ着のみへ着の儘氣散じなり。詞サア〳〵申し重三樣。大分仕事のはかが行た。地ちつと休んでくださんせ。詞イエ〳〵お構ひなされますな。女氣の無い私が內。湯ぢやの茶ぢやのと親子とも。毎度お世話になりまする。コリヤそのお禮でござります。七兵衛殿は病氣で宿へさがつてゐられるげなその間は御遠慮無う。お遣ひなされて下さりませ。まだよつ程此豆腐。手序にみな片付けませう。そんならさうして下さんせ。私も串を刺いて仕舞を。イヤ申し重三樣。斯うしてお前とから並んで。此樣に精出すも。世帶の稽古して見ると。ほんに嬉しうござんする。地初めて見染めた其時に。いとしらしいと思うたが。癪を覺えた。始めにて。廻らぬ筆の跡や先。譯の無いのが緣の端。緣求めて寐てそして。寐る度毎に可愛さの。

十寸鏡取るその隙も。寐た間も忘れた事は無い。詞ア、コレ〳〵。豆腐を其様に振廻すと。私が身内は眞白に。人の白あへが出來まする。ホンニ嬉しいお志。ちつとも仇には存じませぬ。元私は小さい時。餘所へ養子に參りましたが。先が皆死果てて。此頃親仁を尋ねて參り。一月餘り京都の住居。近所に馴染といふは無し。南無三豆腐を眞黑にした。モウ親身といふは親仁ばかり。御存じの通りのあゝいふ氣性。ヤ申しお幾様え此上ながらお頼み申します。あれまだあんな固くろしい。他人の様な事ばかり。お前の心に掛子がある。詞かけども何にもござりませぬ。ほんにかはゆうござります。其ござりますがわたしやいや。そんなら可愛い女房ども。私が心は此燒豆腐。地たとへ火の中水の底。詞そりやほん〳〵でござんすか。幸ひ酒も爰にある。改めて内祝言。必ず嘘をいはしやんすな。何の嘘を誰が言を。そんならほんまに此方の人。女房ども。ヲヽ嬉しやと抱き付き。締めからみたる若藤や。若紫の若女夫面白盛り。フシ花盛り。詞ア、イヤ晝日中このやうに。ひつついても居られまい。お袋様は今朝から南禪寺の方丈様へ。ア、雨もどうやら止みさうな。地幸ひ豆腐も出來てある。詞お迎ひがてら往て來うと。地あぢに世話をば燒豆腐。提げていそ〳〵。フシ出でて行く。地日影はつらく忍ぶ身は。文彌薄におぢて菅の蓑。み傘と申せみ侍。賤の姿にしよんぼりと。高尾を先に義綱は。とあるフシ小陰に立休らひ。詞ヤコレ高尾。冠者太郎義綱ともいはるゝ身が。鳥おどしの様な形をして。そなたと斯うして道行は。此頃で無い大當り。今日の趣向を皆に見せたい。呼んでこい〳〵。アイ〳〵イヤ申し殿様。モウ爰が私が家。サア〳〵お入り遊ばしませ。又この郷助殿は何してぞと。地言ひつゝ寄つて蓑笠をフシぬがせ申せば義綱公。ずつと通つて誰を居ぬか。誰を居ぬか。爰へ來て足洗へ。つひにして見ぬ世話事で。今日は大分草臥れたサア〳〵早うも。地夢現。恂りしながら娘のお幾手盥に汲む豆腐の湯。お足に觸る和らかな。手先にふつと。詞ム、穢い家に似合はぬ奇麗な娘。一夜の情をかけてくれう悦べ〳〵。今の褒美に何をがな。ヲヽ幸ひ〳〵。今まで履いたそれ。その下駄。あたゝまりのあるのを遣はすぞ。是が妹脊の固めの證。後日に嫌と言はさぬ様に。幇間どもが常にいふ。下駄をしつかり預けたぞ。コリヤ誰かある案内せいと。地上座へ直るも千鳥足。門より高尾が。詞コレ妹。久しぶりの姉が顔。見忘れはしやらぬか。何のマア忘れませう。地姉様よう來て下さんし

た。此間からお前の噂。とやかう聞いて案じたが。詞お前の事を言出すと母様の不機嫌。モウ何處にどうして居やんすぞと案じぬ日はござんせぬ。が母様はさつきにから。南禪寺の方丈様へ。往かしやんして留守なれば。お戻り次第よいやうに。私が言はう必ず案じさしやんすなえ。ヲ、よう言うてたもつた。曲輪へ往て逢はぬ中。テモマア大人しうなりやつたの。それなら母様はお留守かや。イヤコレ此お方は大事のお身跡からお供も來るほどに。ちつとの間なりと奥の間で。御休息さしましたいと。地どうやら譯もある體を。見て取るお幾は手をつかへ。詞見苦しけれど奥の間へイザ御入りとすゝめられ。ヲ、行かう〳〵サア地高尾もおぢやと打連れて。一間のフシ内へ入り給ふ。地道におくれて稲妻が息もき尋ぬる黄昏時。南禪寺の門前は爰かと人にとふ屋の。門をそこゝ行迷ふ戻りかゝりしフシ主のお澤。アヽイヤ申し卒爾ながら物問ひませうと。地見合はす顔。詞エヽお前は神浪山左衞門様ではござりませぬか。ヤこな様はお澤様。テモマア久しぶりでお達者な顔。お前も御無事でお婿しや。サヽヽマア〳〵フシ此方へと我が家の内。山左衞門取りあへず。詞ヤナニお澤殿。思ひ出せば十六年以前。若氣の至りと女に馴染み。因果と懐胎。生れ落すと女は相果て。アいか様ナア若いお人の姿たらと。乳呑子抱へうろ〳〵さつしやる氣の毒さ。しかも辰の年。辰の月辰の日辰の刻の。ほんに珍らしい誕生。幸ひ此方に乳もあり。姉と一所に呑ます内。斷りも無うお前は家出。滅相な人ぢやと思うたが。死んだ佛のいはしやるには。餘所の子を世話にするも。一方ならぬ他生の緣必ず疱瘡末に召さるなと。地夫婦して育てる中其愛らしさ可愛らしさ。何時ともなしに此方の娘。詞成程其節我ら旅より歸りお尋ね申せど行方知れず。不思議な事で今日といふ今日。廻り逢うたも古主の御恩。シテ其娘は何と致したな。サアお腹一つ痛ませず。疱瘡麻疹も輕う仕舞ひ。自慢ぢやないが此界隈に。ま一人と無いよい娘。シテマアお前は何故に。アアイヤ拙者只今仕官の身。稲妻郷助と名を改め。お主の供して此邊りに。傾城高尾の親里尋ね。何とおつしやります傾城高尾の親里を尋ねてか。イカニモヲ、其高尾といふはわしが娘のお種ぢやわいの。エヽさうとは知らいで是はしたり。コレハしたりコレハしたりと地絶えて久しき名乘合ひ。問うつ問はれつ憂き事のつもるフシ數々話合ひ。地様子聞きぬる娘のお幾。扨はほんまの父様か。お懐しやと取縋る。別れ程經し親子の名乘り。流

石剛氣の郷助も。親は泣寄り目に涙。大つげなうて哀れなり。母の弊ぞと聞くよりも。高尾は奥より走り出で。おなつかしや母様苦界の身の悲しさは。長の年月音信せず。ようまめで居て下さんした。地殿様のお世話にて曲輪を出でし程もなう。御身に迫る憂き難儀。暫しの内の御不自由と大事の殿様お供してお前を目當てに。詞ム、そんなら何と言ふ殿様のお供して。アイさつきにから奥の間にと。地聞いて心も落付く郷助。何思ひけん母親は。高尾がフシ手を取り門の口。地突出して戸をぴつしやり。詞そなたは爰に置く事ならぬ。何方へなりとも勝手に行けと。詞に恟り。エ、そりや又なぜでござんする〳〵。地假令どういふ事ありとも殿様の傍放れ。脇へとては行く事いや。詞悪い事があるならば堪忍して下さんせ〳〵。コレ母様。地詫言してたも妹と。スエおろ〳〵涙ぞフシ道理なり。詞妹構ふな神浪様もお構ひなされな。ヤイ高尾科はその身に覺えある筈。東國にて誰あらう。肩も並ぶる人もなき冠者太郎義綱公。お膝を入る丶所も無う。見苦しい破屋へお入りなさるは誰故ぢや。今こそは此身なれども。古へは高橋幸内教俊とて。秀衡公の御扶持人。いかに流浪したればとて。現在の汝ゆゑお家を亂し殿様に。御悪名付けさせて。過ぎ逝かれた幸内殿。先祖へ對し言譯なし。御家中廣き其中に。忠臣の武士あらば汝を殺して悪道の。根を絶つ人のありもやせんと。母が覺悟はコレ爰にと。地佛壇より取出す位牌。詞俗名高尾と記せしは。今日は娘が殺さる丶か明日は死骸を送るかと。我が子の死ぬるを待兼ぬるも。古主の御家が大切さ。夫もあの世で御主君へフシ心ばかりの申譯。詞片時も殿様と御一所に置く事ならぬ。うろたへて爰らに居ば。七生までの勘當ぢやぞ。サア〳〵皆様奥へ〳〵と。地母の詞は理の當然押して留めん様もなく。跡に心は殘れども。是非なくフシ奥へ入りにけり。外に。しよんぼり。枯れ紅葉。思ひ高尾がとやかうと。スエ思案に思案さだまらず。詞エ、胴慾ぢやわいなア母様。殿様をお主とは私もよう知つてゐる。地逢ひ初めてから二三度は御意見もしたれど。つい其内にいとしうなり。一日お顔を見ぬ時は私は。人の心も無う。お主も家來も打忘れ。タ、キ夜毎々々添ひぶしの飽かぬ別れの曉に。往なうとあるを引きとめて。ついそれなりに居續けが。かうじ〳〵てお身の仇皆。私からの事なれば。いつそ身を投げ死なうにも。お腹に宿したこのやゝは。私が子でもお主様。死ぬるにも死なれぬ身。どうぞそれまでは堪忍して。お傍に置い

て下さんせ。やいの〳〵と戸を叩き。悶え焦れて フシ泣き居たり。地内はひつそと靜まりて。答へなければ涙をとゞめ。詞ア、さうぢや。何事も皆先世の業と。遽り見廻し拾ひ取る。小石を。入るゝ袖袂。フシカヽリ駈け出でんとする後へ。ぬつと出でたる浮世渡平。片手に高尾を鷲掴み。我が家の内へ放り込み。其身も共に。入相時。蚊の泣く音さへほそ〳〵と。近所洩れくる夜なべ唄。唄君と逢ふ夜の。障りは月夜。月も忍ぶか笠を召す。月も忍ぶか。笠を召す。ナホス詞ア、イヤ只今それへ參ります。私はちと内證に用事を仕舞ふと直樣それへ。お袋の言はるゝ一伍一什尤もぢやが。若い女中を只一人。外に置くのは危い物。高尾樣〳〵〳〵〳〵。ハアコリヤもうこゝに人氣は無い。ア、氣遣ひな〳〵。といふて奥には女ばつかり。此家を明けて出られもせず。どうしたものであらうなア。いか樣世界は味な物。殿のお傍に附添うて。片時放れぬあの高尾。義理詰めになつたれば別れねばならぬ時宜。又十六年前に別れた娘。緣あればこそ廻り合ひ。切つても切れぬ血筋の緣。和泉の小治郎定倉殿。某へ密かの書面。此度秩父の重忠公より御狀到來。その趣きは殿の御身持ち上聞に達し。御覺え宜しからず。されども先祖の戰功に感じ思召し。義綱が放埒の元は傾城高尾故。此女の首を打ち一家中の心を堅め。義綱を補佐すべし。大將の御前は重忠宜しく計らはんとの御内意。其方は人知れず。高尾を打つてくれよとの事。おのれやれお家の爲と請合ひしが。長の年月我が娘を世話にしてくれたお澤殿。其大恩のある人の。眞實の娘の高尾。どうマア是が殺されう。といふて助け置く時は定倉殿の詞も無足。ハテ何としたものであらう。ソレ。我が娘のアノお幾。幸ひ年も似合ひ頃。高尾殿の身代りに。ム、さうぢや。さうぢやと立上り。地思へば〳〵因果な娘。生れた年は母にはなれ。久し振りで廻り逢ふ父親が殺すとは。いかなる業か報ひかと。人目なければどうと伏し聲を。フシ立てずの忍び泣き。地表に人音一寸遁れせめて暫しの命なと。かばふは恩愛あひの間の襖。引立て フシ入りにけり。我が家の中よりそつと出る。渡平は跡の掛けがね締め。遽り見廻し隣の家。入るより早う高笑ひ。ハヽヽヽコリヤモウお天氣でございます。伴は此方に居りませぬか。お袋樣は看經か。アヽなむまみだ佛南無阿彌陀佛。ハアコリヤ皆お留守かえお留守かえ。そしてお客でもあつたかして盃や銚子鍋。エヽ何かな。コリヤ私に呑めと言ふ事ぢやな。是は御馳走でございます。イエ〳〵。肴には及びませ

ぬ。エ何ぢや田樂を拵へて喰へ。アイ〳〵忝うございます。そんなら此燗鍋も爰へ乘せ。アヽコリヤ火が弱い炭を一杯取つてこうと。地餘所の勝手の委しいは何國の浦でも鰥の性根。我が物いらず。十能に一ぱいの炭。フシ打明けて。吹付ける中ばつちりと。炭のはねるに悔りし。詞エエけたいな炭ぢや。すでに顔を燒かうとした。おれが顔に燒傷をしたら。玉子娘になるであろ。ヤ。ヤ。何ぢや美臭い。美臭いわ。貴い衆の弔ひの匂ひがする。何處ぢやの〳〵。ハテ不思議や。今この下駄のえならぬ匂ひ。最前使の詞と言ひ。正しく此家に冠者太郎。ムヽ。ヨシ〳〵と。地一人點頭きさし足し。下駄取上げて土打拂ひ。傍に人もないしようの。明いた戸棚を幸ひと。そつと遣入つてナホス内から戸を。オクリ仕濟し〻顏に忍び入る。フシかくとはいさやしら張の。行燈提げて娘のお幾。裾もぼら〳〵立出でて。詞此マア重三樣は何してぞ。エヽモ人の思ふ樣にもない。早う戻つてくれたがよいと。地日にいく度か取上げる。本フシ合せ。鏡も引きわくる。地母は奥より立出でて。詞お幾や。又髮を結ひ直しやつたか。身だしなみをきつうしやるの。ほんにそなたに言ひたい事。マア〳〵爰へちよつとおぢや。コレ。今までとは違ふぞや。實の父御の手前もあり。あの樣に育てたかと思はるゝも恥しい。といふは重三殿とそなたの中。あるまい事ではなけれども。心の知れぬアノ渡平殿。其子息の重三との緣組は。どうもつまらぬものぢやぞや。若い時の一盛り。面白い程飽きも早いコレ。わしが悪い事は言はぬ。マア一旦は退いて仕舞ひ。末ではどうともなるぞいのと。地母の意見を聞く悲しさ。皆尤もな フシ御事なれど。地重三樣と私が中。未來までもといひかはし。必ず退くな退くまいと。雛樣までを誓紙に入れ。堅い約束今更に退かれうかコレ母樣。是ばつかりは堪忍してどうぞ添はして下さんせと。娘心の後や先つまらぬ樣でも義理は義理。立て通す フシ氣ぞ道理なる。地奥より出づる神浪は。母を押退けお幾が胸ぐら取つて引据ゑ。詞ヤイ爰な恩知らずの女郎め。最前より始終の樣子は皆聞いた。大恩受けたお袋の。事を分けたる今の意見。ようロ答へひろいだな。イヤコレお袋。此娘にさつぱりと。勘當をして仕舞はつしやれ。實の親の折檻は。どの樣な物ぢやうぬ見をれと。地娘を引立てフシ出づる門口。詞アヽコレ待つた山左衛門殿。血を分けた高尾が身替り。義理ある娘を殺さしては。此母が世間へどうも濟まぬ。ヤア何と。サか程ゆゝしい騷動に些細な者の命をかばひ。似せ首の事顯は

れたら義綱公のお身の上。高尾を殺して其首を。定倉殿の御目に掛け。一家中の臍を堅め。義綱公を御代に出さずは。忠ある者とは言はれまいぞ。や尤も〳〵なれども。こなたの娘といひ。殊に腹には主人のお胤。其高尾を殺す時は主殺しの悪名遁れず。コリヤ娘。そちが命を捨つれば な。親は主君へ忠義となり。義綱公の御身も納まる。養ひ親の爲にも古主。コリヤ聞分けて命をくれい。とは言ふものの其方も。地たま〳〵逢うて悦びし其日も去らず手に掛けるも。先生からの定り事。親子の縁も盡き果てていつそ逢はずに仕舞うたら。殺す心もあるまいになま中に縁盡きず。廻り合ふと殺さるゝは。因果の道理と諦めて。堪へてくれよと聲を上げわつとばかりに。スエテ泣き居たる。地娘は始終聞くよりも。父が前に手をつかへ。勿體ない其悔みお主のお役に立つといひ。姉様のお身替り願うても無き身の果報。さりながら一つのお願ひ。どうぞ聞いて下さんせ。詞早う言へ。早う言へ。アノ其お願ひといふのはな。身替りになる事を。暫く延べて下さんせ。其中には母様のおひえへ布子も仕立てて仕舞ひたし。七觀音の其間。清水様へも參りたし。マア一月も。四五年も。經つての上のお身替りと。地何を言ふやら フシ譯もなし。詞ヤアそりや汝何を言ふのぢや。最前より様様と事を分けて言ひ聞かすに。コリヤうぬ。命が惜しいのぢやな。エ、未練者め。卑怯者と。地刀するりと振上ぐる。娘はわつと飛退いて。詞コレ〳〵申しお母様。アレ父様が私を斬るといなア。斬られぬ様に。お詫言をして下さんせと。フシ聲もしどろに震ひ居る。詞ヲ、氣遣ひしやんな殺さしやせぬ。コレ神浪殿。可愛さうにアノお幾はの。地年端の行かぬ心にも。生さぬ中の義理立てて。詞色々に氣を付けてくれるもの。それを知つて親の身で。繼子ぢやゆゑに殺さしたと。どうそれが見てゐられうぞ。何ぼうでも身替りに。殺さぬ〳〵〳〵と。地義理にかこつけ有様は可愛さあまる母の フシ慈悲。詞母様嬉しうございさする。お前の蔭で助かつた。つれない父様なう怖やと。地逃行く。詞帶際引戻し。詞エ、情ない根性ぢやなア。コリヤヤイ科あつて殺すなら。我が代りに此體。一分だめしに刻まれても。見殺しにするものか。地親は百倍惜しけれど。殺さにやならぬは人界の。義理と恩とに責められし。おれが心を推量せよ。詞何時まで言うても詮なき事。地覺悟せよと振上ぐる。母はちつとも身を惜まず。詞アコレ〳〵〳〵神浪殿。必ず刪爾せまいぞや。ハテ扨お袋。悪い了簡。とても助けぬ彼が命。かばひ立てして怪

我せまいぞと 地ちり〳〵と付廻す。アレ〳〵堪忍して下さんせ母様退いて下さんすな。 詞氣遣ひしやんな切らしゃ、せぬと。 地母は我が子の覆ひになり殺さすまいとかばふ親。忠義の爲に殺す親。思ひは二つ三つ叉に水越すばかり浮く涙。涙涙は陸奥の船。浮めんッシ風情なり。人に知られて詮なしと。思ひ切つても手もたゆむ始終の様子。隣から聞き居る高尾は身もよもあられず。走り出でて表の戸。碎けよ破れよと打ち敲けば。懸金はづれ開く戸の。としやおそしと我が家の内。南無三寶と神浪が。隔つる母を及び腰。たぶさ掴んで提げ斬りに首をはつしと打落す。死骸に取付き母娘。前後正體なき居たる心ぞ。思ひやられたり。 地神浪も恩愛の。胸にせきくる涙を押へ。せめて死顔清めんと首引寄せて引上ぐる。たぶさに結込む一通は。 詞父様参る。幾分と。 地聞くより母は涙ながら。 詞ヤア扨は覺悟のあつたのか。 地但しは何ぞ望み事。ドレそれ見せてと取縋る。 詞アヽイマ〳〵此様な未練者。死んだ跡まで恥さらしと。 地引裂く手先に取縋り。なう假令未練な事ありとも。これに上こす形見はない。私に讀まして下さんせと。高見が泣く〳〵。 ッシ押開き。 詞松は千とせを盛りとし。朝顔は一時を一期とし。何事も先生よりの定り事と諦めなん〳〵。わたしが首を打ち。高尾様の身替りになされん由。其場になつたら歎きにおくれ。よもや得討ちなされまじと。態と臆病になり。卑怯な最期を致し候ヤア。機嫌を直され。只一遍の御回向のみ。未來の樂しみに致しなん〳〵。ソレ見やしやんせ神浪殿。是でも臆病者かいなう。卑怯者かいなう〳〵。出かしたな〳〵。ヲヽさう言ふそちが心と知らず。未練者。卑怯者と言うたのが。今では面目ないわい。コリヤ娘よこらへてくれい〳〵やい。母様へ申残しなん〳〵。何と書いてあるぞいの〳〵。エヽ西も東も覺えぬ時より。十年に餘る其間。生さぬ中の隔てもなう。可愛がつて下さんした御恩も送らず。先立つ不孝の程御堪忍なされ下され候。エヽ未來の母様に逢うたりとも。やつぱりわたしはお前様を眞實の母様と存じなん〳〵。ヲヽさう思うてたもるかいの〳〵。コレ何處までも親子ぢや程に。氣を慥かに成佛してたもや〳〵。取分け心に掛りなん〳〵は高尾様の御事。頼み上げなん〳〵。只一言申上げ度き事御座候へども。父様の手前恥しく得書残し申さず。よきに御推もじ願ひ上げ候。申す事はやま〳〵なれど。心急かれ候まゝ惜しき筆留めなん〳〵と。 地讀む中父はそゞろなく歎けば母は聲を上げ。恥しいと書いたのは重三殿のことであろ

ヲヽ此母が吞込んでゐる。コレ〳〵必ず迷うてたもんなや。思へば〳〵可愛やな。貧しい中でしほたらと何角に付けて苦勞さし。いつ華やかなことも無う憂身の果は此様に。親の手にかけ殺すとはいかなる業か報ひかと。親々首に抱き付き。抱き付いて伏し轉べば髙尾も共に泣きくづをれ前後正體歎きしは理。せめて哀れなり。戸棚ぐわらりと浮世渡平奥の一間に冠者太郎。忝なしと駈け行くを。しつかと取つてどこへ〳〵。詞義綱公の御座ありとは。何を證據と言はせも果てず。地以前の下駄を取出し。火鉢へ投ぐれば炎炎と。匂ひは四方に フシ薫じけり。詞ソレ。其銘は薄紅。日本國中廣しといへど。伽羅にて作れる下駄履かんは。義綱ならで何國にある。小言いはずとヤ爰放せと裾振切つて駈出せば。地モウ是までと斬付くる拔けつ潜つつ死骸にて。丁ど請くれば血は滴り。流れ込んだる以前の爛鍋。してやつたりと引提げて一間の内へ駈けこんだり。何國までもと駈行くを。夙くより覗ふ重三郎。走入つて支ゆるを。汝も敵の廻し者觀念せいと斬りつくる。拔合はして上段下段。詞互に手練打合ひしが。重三郎は受太刀も。しどろになつてたち〳〵。よろめく裾を蹴上げられ。どうど轉ぶを乘りかゝり。胸元押へ只一突きの フシ其勢。詞ヤア〳〵神浪山左衛門。必ず早まる事なかれと。地障子をさつと義綱公。敬ひ守護する渡平が有様。さしもの神浪惘りし呆れて。フシ詞も無かりけり。地義綱公は嚴然と。詞侯人どもの計ひにて近頃より心亂れ。晝夜分たず婬酒に溺れ。始めて心付いたる今日。國の爲に汝が娘殺害に及ぶ事。忠義とは言ひながら。娘の最期不便やと。地仰せにはつと頭を下げ。詞ハヽヽヽヽコハ有難き御仁心。娘を斬りしは某が寸忠。恐れながら君の本心いかなる故と尋ぬれば。ホヽそれこそは此渡平。貝田が行ふ邪術にて心惑はせ給ふ我が君。辰の年月揃ふ女の。肝の臓の血を取つて。熱酒に含し。伽羅にて煎じ是を差上げ。かの術を立ち所に塞く事は。奇妙院が懐中の一卷にて我よく知る。此家の娘の血を以て我が君に奉れば。ハヽヽヽ斯くの如く本心になり給ふ。最前髙尾を手込めせしも。過ちをさせまい爲。斯く身を變し守護する我は。熊川源五兵衛秀影。以後は互に申合さん。ハヽア天晴忠臣さりながら。某稚き砌より。よく見知りたる熊川氏。似ても似付かぬ顔形。ホヽヽヽこれこそ館にて數多の組子を支へる折柄。地毒に當りてこの如く相好變るは一つの方便。詞傳へ聞く晉の豫讓は。漆をさして形を變ゆる。我はそれには引きかへて。地敵

より注ぐ毒薬は。却つて味方の天の賜。味方顔して敵の計略。一々に告げ知らさんは我が。方寸の内に在り。ハ、、、、嬉しや悦ばしと。勇み立つたる有様は實にも由々しきフシ忠臣なり。詞ヲ、頼もしゝ方々。さりながら。先祖より傳はる政宗の刀。紛失するも我が誤り。二度代を知る心はなし。松ケ枝節之助を付け置いて。鶴喜代に世を譲り。地是よりは程近き加茂川に隣りたる。砂川に屋敷を建て。我と我が身を押込め隱居。詞御尤もなる御詞。高尾殿も諸共に御供をさせ申さんが。一所に置けば諸家中の心揃はず。身替りも詮なき事になり果てん。ヤア〳〵侘重三郎。高尾殿を同道し。地近江路へ立越えて眞野の知るべに身を忍べ。詞ハ、畏り奉る。しかし雜儀は高尾殿。若輩の某が一所に連れて立退かば。高尾が誠に語らひしは重三郎と流布せんか。よし悪説も忠義故。些細な事は顧みず佞人亡びて其後は。高尾殿の代りに死せし。お幾が爲の初發心。地道具屋行方定めぬ修行の身夕は川に浪枕。朝は土手に身をこらし名を道鐵と改めて。一宇の寺を建立せん。詞ホ實に頼もしき志。娘の爲の善智識。我は是より此首を定倉殿へ持參して。區々なりし一家中の隣を堅むる忠義の門出フシイザお暇と。立出づる母は引留めなう暫し。けふはいかなる日なるぞや。一人の娘に生別れ一人の娘に死別れ。跡に殘りて老の身は。何とかならん浮草の。うき世に秋の紅葉ちる。高尾も共にくど〳〵と。歸らぬ歎き人々も。萎るゝ心取直し。振切る袖や濡るゝ袖包む。涙は身にあまる義理と。恩義と忠義とに別れ。別れて三世へ出でて行く

第五

地王城の隣に並ぶ上郡は。木フシ目出度き御代にあふみ路や。蕪川魚渕水に。事缺かぬ國唐崎も。矢橋も比良も。フシ目に付かず。地錦戸刑部が家來大木戸門兵衛。大勢引連れ濱邊の砂道。詞家來ども參れ〳〵。言ひ聞かす仔細あり。コリヤ渡平汝もとくと聞け。主人刑部殿大望の御企て。コリヤ早やわいらも知る所。貝田殿の計ひにて冠者太郎義綱も。砂川の屋敷へ押込め隱居。鶴喜代も術を以て自滅さするに間は無し。時にかの高尾が事。定倉が計らひにて首討たせしと風聞あれども。其沙汰さだかならざる所に。重三郎と言ふ奴が。高尾を連れて近江路へ立退くと。間者が知らせに某を召され。汝は是より近江路へ立越え。義綱の胤を孕んだ高尾。切殺し立歸れ。敵の末は根を枯らすとの仰付け。それ故に御覺えの一腰をたまはる。ガコリヤコレ主人の御重寶差添なれ

ども波の平行安。斯くも御恩に預る某。此事屋敷で語らんにも餘り火急の事なる故。爰までは一跨げ。地近江路と聞いたばかり雲を摑む尋ね者。何時までかゝらん程も知れず。それ故路金はふんだくに蓄へたり。詞此所まで來る道にて高尾くさい者を見ず。假令高尾に逢うたりとも生物を殺す事某は大不得手それ故汝を召連れたり。ヤレ〳〵しんどい息が切れる。皆も休めと大道に。地主がすわれば家來ども同じッシ座席に居並びて。詞ア、大きな池ぢやなア。シテまあ爰は何と言ふ處。ハイ是がかの近江八景の中。堅田の浮御堂でござります。スリヤ早や爰は近江路な。聞きしに勝る風景々々。堅田の浦の釣小舟浪にもまるゝ。ヨイ如くなりと。古い書物で知つたれども目前見るは今が始め。定めて此湖には。鯉や鮒が澤山ならん。鰻四五本欲しいなア。肴にして一盃呑んだら地風景も一入ならん。詞イヤモウ其樣な肴は澤山。時によると八九尺から一丈餘りの鯰が。取れます。ハテさてえらい物が取れるな。其樣な肴は氣味が惡うて喰はれまい。イヤ又氣味の惡い事を言はうなら。此所は川童原。何時ともなく化けて出て。老若男女の別ちなくかの裏門を念がけます。ヤア。シテ其川童は蜚でも出るか。イエ〳〵日中には出ませぬが。日の暮前からそろ〳〵と。エ、是は又ひよんな所へ來合はしたわい。イエ〳〵お氣遣ひなされますな。私は爰らの生れ。氏子には手指もせず。其川童の親玉は卽ちこの浮御堂樣。スリヤ何と言ふ浮御堂の氏子がゐれば川童。サアノお川童樣はお構ひなされぬか。それでもどうやら氣味が惡い。しかし日暮までは間もあらん。コリヤ〳〵家來ども何をうつかり。其方どもは此近邊高尾が行方詮議して。日暮前に早う歸れ。早く〳〵コリヤ小人數なりと見こなして裏門好みの川童殿に。穴取られては叶はぬぞ。地急げ〳〵と權柄に。主と山路へ家來ども。フシ當所も無しに尋ね行く。詞イヤなに渡平。浮御堂へ參詣し。武運長久祈らん間。身續いて參れ

道行夏野のさらし井

唄世の憂き目。見えぬ山路へ。入らんには。思ふ人こそほだしなれ。ほだしの刷を身に持ちて。ナホス フシ馴れぬ旅路の。旅はゞき 小オクリ草鞋引きしめ〳〵て。雨道のぼる坂路オクリ爪先の。高尾を連れて重三郎。長地都を夙におき別れ心は跡に引かさるゝ。牛石右手に行く末は。何とかならん道草も。タ、キ泣いてしをれてたど〳〵と。せめて暫しは逢ふと見る。夢路に泊る宿もがな。つもり〳〵し憂き事

の。フシオクリあふみ路 二上リべさして辿り行く。人目堤をふたり連。樵る。童がうち群れて。若い女夫と悪口も。何の儘よとナホス聞捨てに山中の宿うち過ぎて。フシ峠はるかに見おろせば。誰かしらべん。琵琶の湖。操る如き細路を。分けつゝ來つゝ。行きがてに。在の女夫が打ちまじり。仲好ささうに連節に 唄 一つくずやに。一つくずやに四季の花。粋な水仙宝咲の梅。いとしかはいと撫子の。よれつもつれつ糸櫻。垣根卯の花杜若。からさを歌の夫婦合ひ。可愛らしいぢやないかいな。此方の最屓と。二人しつぽり抱柏。返事菊蝶比翼に縫はせ。好いたくわん菊四つ紅葉。行きつ戻りつ香の圖の。戀に戀ひわび瀧登り。笹龍膽の二つ紋。可愛らしいぢやないかいな。ナホス鄙も變らぬ フシ妹脊仲。ア、羨し我とても。勤め氣はなれ殿様と。逢ふ夜重る鵲の橋もとだえて此様に。つらい別れの其上に。妹とてもむごらしい。はかない事もわたし故。嘸ぞかゝ様も今頃は。泣いてばつかりござんせう。世を忍び住む命さへ憂き事つもる身の上に。又此末はいかならんと。返らぬ事をくど〳〵とかこち歎くぞ道理なれ。重三郎も諸共に過ぎし夜すがの事共を。本フシ思ひ續けて俱涙。フシ歩みかねてぞ居たりけり。詞護國寺山内辨才天建立。地辨天坊あじろ笠。鼠の麻衣。生木綿の白布子。手甲股引りゝしげに。建立箱脊に負ひ子供に囃されて。餘所目は二本棒。誠は行坊强い坊。鈴打鳴らし町々を。大福長者を授くる利生のそつそ坊。そそそ。そゝくさ。來かゝるフシ道筋に。見合はす顔は。○詞ヤア兩攀樣△ほんにお前は高尾樣。地袈裟衣から齋非時のと。常住お世話になりました。私が爲の一旦那。跡の月から行方は知れず。詞方々尋ねに出ましたが思ひがけない好い所で。地是から愚僧もお供する。見れば大分泣いた顔なぜ浮き〳〵となされぬぞ。そそそそれ〳〵覺えてござりませう。お前樣と義樣と。味な座敷へ此坊主。あたまの樣にまん丸う挨拶をして床の中。○サイナわたしも言ひがかり。背中合して寢て居ても。ついそれなりに張弱う。仲直りすりや。明けの鐘惜うてならぬ鳥の聲。何の烏が意地悪るで。鳴くぢやなけれど後朝の。往なせともない。心から。△ソレヨちつとも離れかね。身仕舞部屋へよし樣を。引き摺つていて其時に○眉も引かずに鐵漿付けてよう似合うたか見ておくれ。こつちへ寄りなヲ、嬉しと。傍へ引寄せ引きしめて。二人の顔を一面の。鏡に寫し見たものを。今はそれには引きかへて。いつの月日に逢ふことも知らぬ田舍へ知らぬ路。言問ふ人もなつの日に。乾かぬ袖の

うき涙。かはいと思うて下さんせと。歎く涙は道もせの　フシ小川に。水や増しぬらん。二人も倶に。露涙しをるゝ心取直し。必ず歎き給ふなよ。頓て御代になし奉り。一つ枕に逢ひの手の歌の唱歌も色めきて。三下り唄味な縁から。つい馴れ染めて。末の約束固めの枕かはらぬ契りと思はんせ。ヲ、それ夫がほんかいな。つとめ勤めも。つい馴れ染めて。麻るに麻られぬうたゝね枕。逢ひたさ見たさは皆一つ。ヲ、それ夫がほんかいな。ほんにチホスフシ浮世は儘ならぬ。△アレ〳〵〳〵日も。山の端にをちこちの落人と人や見とがめん。いささせ給へと手を取つて。急ぐ道筋程もなく群れゐる鴈の翼さへ。頼まん方も片だより堅田の。浦にぞ　三重へ着きにけり

地　近江路は。餘所の。國より涼しさの。まさる憂き身の浮御堂。フシこなたに暫し立休らひ。詞イヤ申し高尾様。道筋とても油斷がならぬ。是から眞野へは程もなし。地知邊の方へ急がんと　フシ皆うち連れて行く向うへ。地とくより待ち得し大木戸門兵衛。渡平諸共現れ出で。詞ヤア〳〵それへ打たせ給ふは都島原に隠れなき。三浦屋の全盛太夫高尾の君と見しは僻目か。正無うも敵に後を見せ給ふか。返し合して勝負あれ。斯く申す某は關八州に隠れなき大木戸門兵衛臂利なりしばさせ給へとフシ呼ばはつたり。地重三郎は物をも言はず一腰抜いて斬付くれば。受合して丁々々。斬合ふ後兩攀に渡平はなにか嘯けば。心得邊り見廻して駈入る間にもあら笑止や。門兵衛刀打折られ。しどろになつてヤア〳〵渡平。詞兩人共に搦め捕れ。取逃しては汝が科。詞番うた諍ふなと。地口は達者に雲霞。フシ砂道蹴立て逃げたりけり。地渡平はしづ〳〵身拵へ傍へ。立寄り重三郎。ヤア親人。コリヤ。何にも言ふな。コレ〳〵斯う〳〵。ナ合點かと二打ち三打ち。打合ふ體にて程よき所。コリヤ捕つたわと用意の早縄。コレハと立寄る高尾も共に。同じく掛ける三寸縄　フシ二人を引立てつつ立てば。地遠目に斯くと大木戸門兵衛走り。三重カ、リ歸つてホ、ウ手柄。手柄々々。地某程の武士なれど。敵に刀を打折られ逃げるではない引退く。詞コリヤ是耻に似て耻にあらず。往時壇の浦の戰。箕尾谷四郎國俊。地景清に刀打折られ少し汀へ引退きしを。詞誰か一人臆病とや言はん。今の代までの美談ならずや。ア最うよどさります。お前の耻ぢやどざりませぬよ。シテ此二人はどう致しませう。知れた事都へ引け。是はしたり仰山な。イヤ申し。此邊に知邊のある奴輩。取返されたら詮ない事。いつそ二人を斬殺し首にして歸

りましよ。妙計々々。然らば骨折御苦勞ながら。アヽイヤ待てよ〳〵。最前も言ふ通り。生き者殺すは大きな嫌ひ。ましてや是は人の首。目の前で斬るを見たら。忽ち身ども 地 持病の癪。 詞 イヤ〳〵やはり京での事。ハテさて埒の明かぬ。コレ私がたつた一討ち。お前様もそれ程怖くば。そちら向いて目を塞いでござりませ。妙計々々。然らば仰せに任さんと 地 兩袖顔に押當ててあちら向いたるその隙に。二人の繩を解きほどき又も囁きさゝやけば オクリ 二人は彼處へ フシ 忍ぶ中。 地 邊りの畑見廻して。西瓜を二つばつさりの。音にきいやり。 詞 南無阿彌陀佛南無妙法蓮花經。浮世氏。浮世氏。二人の者を仕止めたか。何の苦もなくさつぱりと。サア〳〵お改めなされませ。なう厭な事いやな事。もう見ずとよしにせう。是は又卑怯千萬それでも武士と言はれますか。ム、見ようかの。アヽ氣の無い物ぢや。しかし怖い所を見るも主命。さりながら。首實驗には故實ありと。 地 兩手を顔の覆ひにし。指の間よりさし覗き。 詞 ハツアいか様なア。生顏と死顏は相好の變るもの。今迄は二人とも。あてやかなる顏なりしに。うそ氣味わるう眞青に。少し赤みの見えたるは。血の流れたる所ならん。切口の。 地 立派さは天晴ゆゝしき手の内や。 詞 待てよ待ちなさいよ。いかに切れた首ぢやとて。目鼻も口も何にも無う。ずんべら坊主の此斬首。俄に瘡は搔くまいし。斯くも形の變りしは。ハテ〳〵〳〵合點の行かぬ事ぢやアと 地 諸手を組み フシ 暫し。見とれて 詞 コリヤ西瓜ぢや。ヤ何と。ドレ〳〵ほんに西瓜ぢや。ハテ不思議な。たつた今二人の首。打放して間も無う。西瓜になつたはコリヤどうぢや。門兵衛様門兵衛様。コリヤ只事ぢやござりませぬ。浮御堂の近邊で。血をあへした其答めか。そろ〳〵日暮になつて來る。お川童様も出やしやる時分。御用心をなされませ。ヤア扨はさう言ふ事かいやい。それぢやによつて首打つ事は。よしてくれろと言うたのに。どうやら空も曇つてくる。コリヤ〳〵渡平。きちつと此方へ寄つてくれと。 地 そこら フシ 眺める其折ふし。 地 追々歸る家來ども。 詞 旦那。ワイと飛退きア、申し〳〵。私は何にも存じませぬ。渡平が業でござります。 地 御免々々と手を合せ。 フシ 拜み廻りて震ひ居る。 詞 是は〳〵正體なき旦那の有様。人の見る目も恥ぢ給へ。コレ申し。家來どもでござります。何家來ども。さう言うて身どもを化すのであらう。誓文々々家來どもでござります。ドレ〳〵ほんに家來だ。ヤイうぬら。言語道斷不屆者。歸つたら歸つたとそつと言へばよ

い事を。周章しう吐したで。武士のあるまじい。臍を茶種にして退けた。身が目通りには一人も叶はぬ。何國へなりとも立去れと言ふ所なれど今は言はぬ。餓鬼も人數ぢや。わいらでも力になる。ソレ最前聞いたナソレ。お川童様のお咎めかして。何やらかやら怪しい事だらけ。サア〳〵〳〵一時も早う 地 急がんと。 フシ 立歸らんとする折ふし。 地 時分はよしと重三郎。浮御堂の時太鼓 コハリしどろ拍子に打ち立つれば。 ナホスワツト 皆々腰も抜け。うろたへ廻る目先へずつと顯はれ出でし兩攀が。 惡抑も是は浦島太郎十代の後胤川童の冠者乘好なり。 地 アヽラ恨めしや腹立ちや。 詞 汝神慮を恐れもせず血をあへしたる咎めに依つて。早々命を召取るなり。貴殿の秘藏の情所我が神變に吸ひ取つて。穴ぢやう往生さしてやろ。エヽ氣味の悪いイヤコレ渡平殿。貴様はあなたの氏子とやら。どうぞお詫をして下され。成程々々。元はお前の業でも無い。主命故の亀相なれど。かう見た所がよつ程きついお腹立ちの様子。つい一通りでは合點はなされまい。ハテどうした物であろ。コレござりますか。ある〳〵。それをあなたへ差上げて。お詫言をして見ましよ。イヤ申し川童の冠者様。畢竟是は間違ひ事。あの者が申しますは。近頃憚りな事ながら。少々持合せの金もあれば。それをお前に皆上げます程に。どうぞ御了簡下さります様と。アヽ氣の毒な物でござります。私を段々頼みます。今申した其金を皆取つて。堪忍しておやりなされませ。 地 イヤ金銀は人間の寶川童道には有つて益なし。 詞 只金銀の其金の後の方におはします。かのソレ今の 地 情所が所望なり。 詞 アヽ悲しや。どうやらお臍がくすぐつたい。コリヤ〳〵家來ども。ソレ下の帶をきつと締めて。裏門口を用心せい。武士のあるまじい。屋敷を餘り急いだで。不斷の儘の越中褌。締りが無うて便りがないと。 地 主も家來も懐へ。手を入れ締める下の帶。下心ある浮世渡平。彼奴出家だけ慾氣無し。物を言はしては悪からんと傍へ立寄り フシ 恭しくも。 詞 うす〳〵うさすはもふ。さきかちんぶりかくさんきんにやらい。とらやあ〳〵と スエテ 低頭平身。なしければ。 地 譯は知らねど器用者。出たらめ臺詞の唐詞。 詞 しやうちいにいつうばてれんてう。かすてらやうかんのせたんけい。 地 聞くより フシ 渡平は此方へ歸り。 詞 あなた様には龍宮育ち。日本詞をお遣ひなさるりや。どうでも勝手が違ふゆゑ。御苦勞なだけ腹立ちもきつい。そこで今の様に龍宮詞で受け答へ。先づは神慮を宥めて置いた。時に又今おつしやつたは。地

獄の沙汰も金とやら。龍宮界も有様は。去々年の大飢饉で。米が百に四合五勺。其揚句ゆゑきつ詰り。成程路金を皆おこせ。又お前の大事の物を。今の金と一所に上げたら。今のソレ穴錠往生は赦してやろとの御詫宣。サア〳〵早うお上げなされませ。スリヤ何と云ふぞ。貯へた路金と。外に大事の物と云ふはヲヽソレ〳〵。主人より賜はつたるこの指添。二色さへ差上ぐれば。御了簡下さるか。忝し〳〵と。地懐中探しこて〳〵と。取出す肌打飼。有りだけ粉だけ。指添共に。ワシ一つに摑み。詞サヽヽ是をあなたへ上げてくれ。一時も早いがよいぞ。アヽコレ〳〵浮世々々。マア〳〵お待ちよ。侍の事なれば。腰の物は無くてもよいが。折入つて相談がある。爰から京へは餘程の道でござんすは。サヽヽマヽヽうんと云ひな〳〵。エ承知か〳〵。此金を皆上げてはサヽヽマヽヽうんと云ひな〳〵承知か〳〵。蕎麥を一膳食ふ事が成らぬは。サヽヽマヽヽうんと云ひな〳〵。承知か〳〵。爰はどうぞお情ぢやが。南鐐一片殘されまいかな。エヽけちな。神に物を吝しがると。忽ち罰をお當てなさるゝ。スリヤ罰をお當てなさるゝか。ハテ是非も無い事ぢやな。そんなら南鐐とは云ふまいが。あなたのお名に象つて。川童六十四文は成るまいかの。一文も半文も成りませぬ。スリヤ一文も叶はぬか。ハア。地はつとばかりに聲を上げ。かつぱと伏すと云ふ事は。ワシ此時よりも始まりける。詞エヽぐづ〳〵と。早うお上げなされと。地吝しがる物を無理無體。引つたくつて此方に向ひ。詞青黄赤白黑。瑠璃紺路孝茶中赤藏。おいてうかふたんぶたうんすん。辰ヤア〳〵と差出せば。地氣味悪さうに手に取つて。詞かねんを取るんは嬉しんが。どうやら尻んがきそんばか。牛ヤア〳〵。サア〳〵門兵衛様〳〵。サア〳〵川童様の御機嫌が直つた〳〵。神明納受の驗には各方に悉く。福壽海囲滿樂。天肇和合樂の。大福長者に成る。結構な文をお授けなさるゝぞ。皆々お請けなされませ。地我等は其内神前を。祓ひ清めて參らんと。何國とも無く出でて行く。詞サア〳〵コリヤ〳〵家來ども。只今お授けなさるゝぞ。うぬらも心を清淨に。ハヽア有難うございます。地ヤレ〳〵皆の衆よ。正直正路に我は愛で壽福の文を授くべし。龍神詞は分るまじ日本流に教ゆべし。皆々信心凝らしつゝ嚙してくれよ凡夫たち〳〵。〳〵〳〵。はやしてくれよ凡夫たち。〳〵。詞左の腰を延べ其上に右の手を拳にして大指を開き小指の甲を曲げ左の掌の上に置く事しやほんの如く是を以

つて則ち七度震動せば貧所忽ち福者と成り。寶の藏を並べ建て無量の財福を充滿する事雨や霰の降るが如く金と銀と錢と瑠璃と硨磲と瑪瑙と珊瑚と琥珀と眞珠の七寶出生して大福長者と成るなむはくじやきやううかやしやきやらべいしんたまにひんてんんうんそはか。なうまくさらばたゝぎやていひゆびじんばぼくけいびやくさらばた。けんうどぎやてそはらけいまんきやぎやなうけんそはか。どくさいしやうかやとんとく如意。寶珠わうたい辨才天。そそそ。こそ〳〵。とこそ 三遍へ立歸る

第六

唄 いつまでも。變らぬ御代に。あひ竹の。よゝは幾千代。八千代經る。ナホスフシ千代を壽く。爪音は。鎌倉山に美を盡す。冠者太郎義綱公の奥御殿。懦弱の聞え隱れなく砂川へ隱居ありければ。御長男鶴喜代丸幼稚ながらも御家督定り。近き頃より御病氣とてお傍には男を禁じ。諸士の對面叶はねば家中を始め典藥まで。何としあんもせんじ樣。常より館物さびし。地 諸士頭信夫の庄司爲村の後室沖の井御前。渡會銀兵衛が妻の八汐。褶姿しとやかに。フシ禮儀正しく打通り。詞イヤ申し八汐樣。大殿義綱樣御隱居遊ばし。御幼稚ながら御家督の鶴喜代樣。此程より御不快とて御食事も召上れず。殊更人に逢ひ給ふ事がお嫌ひとて。男を禁じて近習小姓も遠ざけられ。お傍には政岡殿。腰元衆の外叶はず。地 何卒直ぐに御容體伺ひ申す私が心さればいな。詞 手前の夫銀兵衛は御膳奉行と云ひ。今後見の刑部樣の御出頭。それさへ御對面叶はぬとは。コリヤ政岡の胸中に。深い所存があつての事か。モ今日は是非とも御容體見屆けねば下られずと。奥女中まで申込み置いたれば。御保養かた〳〵迫付け是へお出での筈。地 何かの樣子とつくりと心をお付け遊ばせと。フシ二人が噂の程もなく。地 奥より腰元走り出で。詞 殿樣是へ御出でと。フシ知らせの中に。地 まだ頭是なき鶴喜代君。お傍のお伽も同い年政岡が子の千松が。昇いて出でたる鳥籠の。エイ〳〵サツサ。愛らしき。フシ跡に付添ふお乳の人。はつと二人は頭を下げて。恐れ敬ひ奉る。地 政岡御前に手をつかへ。詞 信夫の庄司爲村の後室沖の井。渡會銀兵衛の内方八汐。御病氣の御樣子。伺ひのため參上と。地 申上ぐれば大人しく。詞 二人共よう見舞うてくれた。大儀。地 大儀と情ある。仰せにはつと恐入り。詞 誠に存ぜしよりは麗しき御容體。見奉りて我々が安堵。さりながら御食事進み給はぬ由。モ一家中の心遣ひ。恐れ

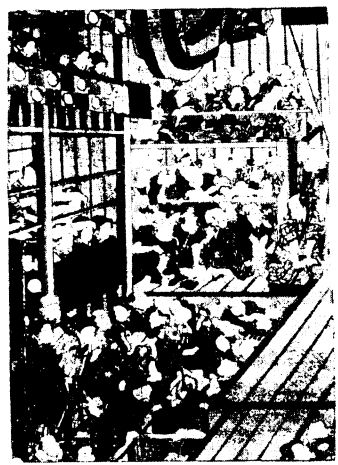
ながら沖の井が。申付けし今日の御膳。少しなりとも召上られ下さる様。地ソレ〳〵早うと詞の下。はつと答へてお傍の女中。捧げる膳の目八分。フシ御前に直せば。嬉しげに。詞そんならモウ。飯食うても大事ないかと。地座に着き給ふを政岡が。尻目に睨まれ。もぢ〳〵と。詞イヤ〳〵。おりやモウ飯は厭ぢや〳〵。アレ見よ千松。雀が飯を食ひたいやら。口を開いて鳴くわいやい。弱い奴ぢやと地乳母が顔。見やる目元に涙ぐむ。スエテ御心根のいたはしさ。ちつと堪へて政岡が。イヤ申しお二人様。あの通り御膳をお進め申しても。いやぢや〳〵と御意遊ばす。お傍に付添ふ政岡が心遣ひ。御推量下さりませ。が醫脈を伺ひ申さんにも。男たいせし者はお嫌ひ。それ故に典藥も。ヲヽ此八汐もそこへ心の付きし故。御典藥大場道益が妻の小卷。女ながらも夫に劣らぬ醫術の譽れ。御容體伺はせん爲召連れて參りし。地ソレ召出せと詞の下。はつとお次へ腰元がやがて。伴ふ年輩も。四十に近き。二つ髷襠さばきも。しとやかにフシ遙か。末座に手をつかへ。恐れながら。大場道益が妻の小卷。御脈伺ひ奉らんと。地すり寄れば政岡が。いさと進めた鶴喜代君。本フシ御手を出させ給ひければ。恐れ慎しみ御脈體。とつくと伺ひ驚く面色。詞ヤアコリヤこれ只今必死のお脈と。地いふに恟り驚く人々暫し。フシ詞も無かりしが。地沖の井御前不審顔。詞イヤコレ小卷。御物ごし御顔色常に變らぬ御樣子。それに必死の御脈とは。ハア成程御不審御尤も。仰せの通り麗しき御容體。それに引きかへ絶命の御脈は。モ何とも不思議。恐れながら若君樣。是へ御越し遊ばされよと。地遙かこなたへ誘ひて。又も伺ふ御脈に。はたと手を打ち。ハテ不思議や。詞あれにて見れば必死の御脈。今又是にて伺へば。常に變らぬ御脈體。ハテ。地怪しやと眉に皺。政岡始め人々もフシ更に心は納らず。地何思ひけん沖の井御前。長押に掛けたる長刀追取り。ぐつと突込む天井の。板こじ放せば怪しき曲者。落つるを透さず取つて引伏せ。用意の捕縄手ばしかくフシ高手小手にくゝり上げ。詞お脈の不審の其根元。サア眞直ぐに白狀せよ。陳ずるに於ては水責め火責め。憂目を見するがサア〳〵何と。地きめ付けられて詞アヽコレ申します〳〵。イヤモ斯う現るゝ上からは有樣に申します。鶴喜代君を殺してくれと。賴まれたも褒美が欲しさ。ムヽシテ其賴み手の名は何と。サ何者に賴まれた。サア〳〵どうぢや。サア何とと地俱に詰め寄る政岡が。顔を眺めてテモ扨も。詞アノしらしい顔わいの。其

頼人は誰であらうぞ即ち此方。ヤア何とア、コレ〳〵。もう隠しても隠されぬ。千松とやらを代に立てたさ。若君を殺してくれとナソレ。頼ましやつたぢや無いかいの。ヤアコナ下郎めが大それた偽言。コリヤ自らを科に取つて落さん爲。已れを頼んだ拵へ事ぢやな。イヤコレ政岡殿。モいか様に諍はれても。こなたの工といふ事は此八汐が睨んで置いた。とても叶はぬ覺悟召され。ム、假初ならぬ一大事。マとつくりと糺しもせず。妾が業とおつしやるには。何ぞ慥かなヲ、證據といふは其曲者。サ現在こなたを傍に置いてあの通りに言ふからは。モ是に上越す證據はない。がまだ其上に。コレ此一通。鶴が岡の神木の本に。埋めてあつた釘付けの箱。内に込めたる願書の文言。若君を調伏し。我が子を出世させたい望み。願主松ケ枝節之助。乳母政岡と。あり〳〵と書いたが慥かな證據。サ何と違ひはあるまいがの。イヤ〳〵それも眞赤いな似せ筆。更々此身に覺えは無い。無實を言ひ懸け跡で後悔なさるゝな。ム、是程慥かな證據が出ても。まだ潔白なあらがひ立て。シテ又覺えないと云ふ。サ證據があるかな。サアそれは。サア〳〵何とと。地詰め掛けられて政岡が。覺えなき身の言譯も。證據無ければ今更に。スエテ無念涙の。外ぞ無き。詞ヲ、言譯はあるまい〳〵。言譯無くば遁れぬ科人。節之助諸共に。牢屋へ打込み急度糺明。今日より若君の御守役は此八汐。ヤア〳〵侍中。政岡を縛り上げ。牢屋へ引けと。フシ呼ばはるにぞ。地若君はおろ〳〵涙。詞乳母が牢へ行くなら。おれも付いて行きたいわいやい。エ、そりやマア何を御意遊ばす。八汐が申す事ようお聞き遊ばせや。あの政岡はな。君に敵たふ大科人。イヤ科人でも大事ない。乳母は何處へも遣る事ならぬ。デモ伯父御樣。刑部樣の仰付け。イヤ〳〵其刑部も其方達も。皆おれが家來ぢやないか。それ程牢へ入れたくば政岡が代りに。そち達から牢へ行け。乳母と放れて居る事はいやぢや。地いやぢやと腕白も。自然と備はる仁心に。嬉しさ限り政岡が。身に泌み渡る有難涙。フシ只手を合すばかりなり。地さすがの八汐も主命に。返答無ければ沖の井御前。詞君の仰せまでもなくお乳の人に科は無い。朝夕お傍を片時放れぬ政岡殿。サ誠若君を害せんと思はゞ。人手を頼むまでもなく。仕樣もやうもあるべき事。サそれに何ぞや此曲者。誠政岡に頼まれなば。一旦は隠れ遁るゝ筈。自らが長刀の光に脆く飛び下りしは。ハテ頼もしい頼まれ人。又道益が妻の小卷。必死の脈と云ひたるも。モあまり割符が合ひ過ぎて。此沖の

井は呑込めぬ。アヽイヤそればかりでない此願書。願主松ケ枝節之助。政岡とあるからは。イヤ〳〵それとても同じ事。かかる大事を工む者があり〳〵と名を顯はし。證據の種を殘し置かうや。サ若しや其名が八汐とあらば。お前は科を被る氣か。モあんまり工みが淺はかで。詮議立てするお人まで。底意の程が心得ぬ。曲者めを拷問して。五十四郡を呑まんとする工みの底を白狀させ。惡事に與する方人ども。一々首を並べて見せう。サとつくと見物成されよと。地此場の善惡明白に見通す如き辯舌は。實にも信夫の後室と。フシ奥ゆかしくぞ見えにける。地理の當然に拉がれて。八汐は尙も減らず口。詞テモつべこべと能うおつしやるの。が所詮分らぬ水掛論。モ何時まで言つても同じ事。マア此儘に差措いて。追つての詮議それまでは。小卷も下つて休息召され。地と目くばせし作ふ二人に一物の。有りと見拔きし後室の眼鏡はづさぬ一捌き。曲者引けと嚴重に。心は隔つ。竹の間のオクリ襖へ押明け入りにける。地跡見送りて政岡が正無き事も身に懸る。科は晴れても晴れやらぬ。養ひ君の行末を誰に。問ふべき樣もフシ無く心。一つの憂き思ひ。地物案じなる母親の。顏を詠むる千松に。偽喜代君も打守り。詞コレ乳母。モウ何云うても大事ないかや。アイ〳〵外に誰も居りませず。何なりとも御意遊ばせ。ほんに先に沖の井殿。若へ御膳を上げた時。豫て乳母が申した事お聞入れ遊ばして。ようマアお上り遊ばさなんだナア。それでこそ此乳母が。お育て申した若殿樣。ヲヽお出かし成された天晴なと。地譽むればあどなき稚氣に。詞ヤイ乳母。ひもじいと云ふ事は。強い武士の云はぬ事と。常に其方が云うた故。おれは云はねど。先にから空腹に成つたわやい。ヲヲお道理でござります。今日は思はぬ事故に。御飯の拵へも遲うなり。あなた樣にも嘸ぞお待ちかね。千松もよう辛抱しやつた。地モウ拵へて上げますと立上れば。詞ナウ乳母。こゝに在る此膳を。食べるのは惡いかや。アヽイヤ申し其御膳を上げる程なれば。乳母も苦勞は致しませねど。此程から怪しい事ども。忠義厚き沖の井殿。差上げられた其御膳。疑ひはなけれども。油斷の成らぬ此時節。上げてよければ此政岡が上げまする。コレようお聞き遊ばせや。今お館には惡人蔓り。御近習小姓膳番まで。ちつとも心は許されず。忠臣の節之助は。不義者とて遠ざけられ。力とする者も無く。朝夕の御膳は皆庭へ捨てさせて。私が手づから拵へて差上ぐるも。若し毒藥の工みもと。夢微塵心はゆるされず。空腹なもお道理ながら。

御前のおこらへ遊ばす爲。此千松も四五日前から。地三度の食事もたつた一度。忠義故ぢやと堪へて居ります。詞コレ千松。そなたは云ふ事よう聞いて。何とも云はずに辛抱する。ヲヽ賢い〳〵強い〳〵強者ぢやと。地譽むれば千松。詞コレ母様。侍の子といふ者は。ひもじい目をするが忠義ぢや。又食べる時には毒でも何とも思はず。お主の爲には喰ふものぢやと云はしやつた故に。わしや何とも云はずに待つて居る。其代り忠義をして仕舞うたら。早うまゝを食はしてや。それまでは壓日までも何時までも。かうきつと坐つて。お膝に手を突いて待つて居ります。お腹が空いてもひもじうは無い。地何とも無いと澁面作り。涙は出づれど稚氣に譽められたさが一杯に。詞こちや泣きはせぬわいと。地額を撫でて泣顔を。隠す心は流石にも。名に負ふ フシ武士の胤なりき。地母は健氣さいぢらしさ スエテ目に持つ涙心には。御前に聞かす譽め詞。詞ヲヽさうぢや〳〵。強者ぢや。千松はいかう強う成りやつたわいの。イヤ千松よりおれが強い。ヤイ政岡。おれはちつとも空腹には無いぞよ。大名といふ者は。飯も何にもたべずに。かう坐つて居る者ぢや。ナウ乳母おれは強者ぢや。是は又氣疎い事ぢやわ。さうお行儀な所を見ては。まだ〳〵千松などは叶はぬ〳〵。ヲヽお強い〳〵。さうお強うては。コリヤ早う飯を上げさな

るまい。地ドレ拵へうとかい立つて。傍へに飾る黒棚より。オクリ取出す。錦の袋物。風爐に掛けたる茶飯釜の。中太夫フシ湯の試みを千松に。飲ます茶碗も樂ならで。タ、キお末が業を信樂や。いつ水指しを炊ぎ桶。流す涙の水こぼし。心は清き洗ひ米。釜に移して風爐の炭。直して煽ぐ扇さへ。骨も碎くる思ひなり。地アレもう飯ぢやと御機嫌の。我が子も共に悅び顏。見れば胸まで突つかくる。涙呑込み呑込んで。詞モウ上げますぞえ。母様早う上げましてや。ヲヽ上げませいで何とせう。今上げまするまちつと煮立つ其間。お氣に入りの雀の子。モウ親鳥が來る時分。地其處へ直してお慰み。アイ〳〵〳〵と千松が返事はすれど立ち惱み。歩む姿もたよ〳〵と。フシ置き直したる小鳥籠。文彌地ちうと教へる親鳥の軒端の竹に飛びかはす。子は孝行に面痩せて。はぐくみ返す烏羽玉の。涙を隱すフシうなひ髮かゝれは直ぐに飯になる。ソリヤもう飯ぢやと悅ぶ子。詞コレ千松。何とも無いと云ふ下から。忙しない何の事ぢや。何時も唄ふ雀の歌。唄うて御前の御機嫌取りや。エエ鈍な子ではあるわいと。叱られておろ〳〵涙。スエしやくりながらの湿り聲。唄こちの裏のちさの木に〳〵。雀が三疋留つて〳〵。一羽の雀がいふ事にや〳〵。夕べ呼んだ花嫁御花嫁御。竹の下葉を飛び下りて籠へ。寄來る親鳥の。餌食みをすれば子雀の。嘴フシさし寄する有樣に。詞アレ〳〵乳母。雀の親が。子に何やら喰はし居る。おれもあの樣に。早う飯がたべたいと。地小鳥を美む御心根。ヲヽお道理ぢやと云ひたさを紛らす聲も。フシ震はれて。唄わしが子息の千松が〳〵。詞エヽコレ千松。殿樣の御機嫌を。エヽ何を泣顏する事がある。ちひさうても侍ぢや。コレ。唄七ツ八ツから金山へ〳〵。一年待てどもまだ見えぬ〳〵。詞乳母まだ飯は出來ぬかや。ヲヽもう出來まする。唄二年待てどもまだ見えぬ〳〵。詞母様飯はまだかい



のェ、忙しない。そなた迄が同じ様に行儀の悪い。イエ〳〵わしは食べたい事は無いけれど。御前様がおひもじからうと思うて。ェ、何のお強いお殿様が。おせがみなされう。ソリャ其方がせがむのぢや。イエ〳〵私はせがみはしませぬ。サアせがまずば今の唄。聲張上げて唄うて見やと。地云はれて涙の聲張上げ。唄ほろり〳〵とお泣きやるが〳〵。地力なく〳〵泣聲を隱して連れる母親が。何が不足でお泣きやるぞ〳〵。唄の唱歌も身に當る。涙はお乳がフシ胸の内子故の。闇で遣る瀬なき。地若殿小陰を打詠め。詞アレ〳〵千松狆が來る呼べ〳〵。狆よこい〳〵と。地呼べば駈けくる緣の上。詞ヲヽよい所へよう來たな。アほんにわれは仕合せ者。おすべりの此御膳。殿様の御機嫌を。直した御褒美戴けと。地紙折り敷いて並ぶれば悅ぶ體を見る若君。詞乳母おりやアノ狆に成りたいと地羨み給ふ御風情。聞く悲しさを堪へかね。詞ヲヽお道理ぢや〳〵。地日本國の其中に幾億萬と限り無き。人の果報を請け給ひ五十四郡の御主と。榮耀榮華は上も無き何暗からぬ御身にて。思ひがけ無い御辛抱。詞縱へ賤しい下々でも。斯ういう事が有るものか。地ましてや遂に見も聞きも。長地涙ながらに政岡が申す事とておとなしう。閉入れ給ふ痛はしや。現在御内の御家來が。詞邪非道に組み從ひ。殺害せんとの工みとは。知つたる故に薩身に添ひ。おまめな御身を御病氣と世間を僞り胴慾に。幼い御身に朝夕さへ思ふ樣に上げぬ故。鳥獸の餌ばむをば羨しがるお詞は。御尤ともお道理とも云ふに云はれぬ御身の因果。雀や犬に劣つたる宮仕して忠義ぢやと。云はれうものかと喰ひしばり。胸も煮立つ風爐先の。屏風にひしとフシ身を寄せて奥を。憚る忍び泣き。地幼けれども天然に太守の心備はりて。詞コレ乳母何で泣くぞいやい。其方や千松もたべぬ内。おれ一人忙しいと思ふなら。モウ堪忍して泣いてくれな。其方達二人がたべぬ内は。何時までもおれは堪へてゐる。おれがたべても乳母がたべずに。死にやつたら悪いナア千松。そちが死んでも悪い。ナア。ハイ〳〵〳〵。ようおつしやつて遣はされます。アヽ有難う御ざります。乳母が今泣いたのはな。アリヤ飯の早う出來る呪ひ。何の悲しい事はござりませぬ。コレモウ涙は無い。ナ御覽じませ。ホヽホヽヽヽ。をかしい〳〵サア〳〵今の呪ひで。モウ飯が出來ました。いつもの樣に。地握々して上げましよと。飯七取つて手の内に。フシ結ぶを千年と待侘びて手を出し給へば。詞マア〳〵お待ち遊ばせや。吟味の上にも吟味せねば。御辛抱の

甲斐が無い。地先づ御毒味と千松が。顔を眺めて。詞ム、氣遣ひない。サア〈〉地御前御心靜かに召しませと。云ふにいそ〈〉御悅び。千萬石を手の裡に。握る御身に引替へて。只一握りの握飯を數の珍味と思召す。御心根の勿體なやと君を思ひ我が子を思ひ。心の奥の フシ忍ぶ山忍び。涙の折からに。詞梶原樣の奥方御入りなりと。呼ばはる聲。ハテ心得ぬ梶原の奥方とは。何にもせよお通し申せ。コレ千松。そなたは次へ。常々母が云ひし事。必ず〈〉忘れまいぞ。サ早う。地早うと追ひやつて。 フシ衣紋繕ふ其内に。沖の井八汐も出迎ひ敬ふ。襖押し開かせ。地梶原平三景時の奥方。夫の權威に榮え御前。しと〈〉と上座に直り。詞ヲ、何れ〈〉も出迎ひ大儀。自ら今日來りしは右大將の御上使。夫景時承はれども。義綱の一子鶴喜代病氣によつて。男たる者を禁じたると聞きし故。夫に代る此榮。義綱隱居の其後鶴喜代の所勞。殊に食事も進まぬ由。御心を付けられし此御菓子。頼朝公より下され物。有難く頂戴あれと。地持たせし フシカ、リ菓子箱さし出せば八汐引取り。詞コレハ〈〉有難い大將よりの下され物。サア〈〉と申し若殿樣。早う頂戴遊ばしませと。地蓋押開き。詞テモまあ見事な結構な此お菓子。イザ召しませと フシ差出す。地流石童の嬉しげに。立寄り給ふ鶴喜代君。詞ア、申し御前樣。又其樣なさもしい事。御病氣の御身なれば。お毒になつたら何となさるゝ。地此方へお越しと政岡が。詞打消す榮御前。詞ヤア頼朝公より下さるゝ御菓子。何疑うて頂戴させぬ。是非此榮が食べさせる。ア、イヤそれでも。ム、但し頼朝公の仰せは背いても苦しうないかサア。サア。サア〈〉と フシ權柄押し。地奥より走つて千松が。其菓子欲しいと引掴み。何の頑是も只一口。八汐が恨り榮御前。毒の工みの顯れ口。忽ち惱亂日を見詰め蹴ちらかしたる フシ折は散亂。地八汐は透かさず千松が。首筋片手に引寄せて。懷劍ぐつと突込めばわつと一聲七轉八倒。驚く沖の井政岡が フシカ、リ仰天ながら一大事と。若君押し遣る我が部屋口。戸口に付添ひ フシ守り居る。詞ヤア何をわざ〈〉。騒ぐ事は無いわいの。忝くも頼朝公より下されし此折。蹴破りしは上への無禮。小さい餓鬼でも其儘には差置かれぬ。それ故に手に懸けたは。お家の爲を思ふ八汐が忠節。ム、ハ、ハ、、、、。ヲ、可愛さうに〈〉。痛いかいなう〈〉。他人の私さへ涙がこぼれる。コレ政岡殿。現在の其方の子。悲しうも無いかいの。何のマアお上へ對して慮外せし千松。御成敗は御家の爲。ム、スリヤ。是でも此方

は何とも無いか。ヤ是でもか。〳〵と。地騙殺しに千松が。苦しむ聲の肝先へこたゆる辛さ無念さを。ぢつと堪ゆる。辛抱も只若君の大事ぞと。涙一滴目に持たぬ。男勝りの政岡が。忠義は先代末代まで又有るまじき烈女の鑑フシ今に其名は。芳しき。地榮は始終政岡が。素振に氣を付けほゝ笑み。詞ヲ、出かした八汐。右大將より鶴喜代へ下さるゝ大切の御菓子。小倅めが出しやばつて。すつての事に大事の工み。イヤアノ大事の菓子を荒した科。殺したは八汐が働き。さすが渡會銀兵衛が妻程ある。政岡には自らが云ひ聞かす事もあり。沖の井八汐兩人は。暫く次へ間を隔て。遠慮召されと地榮の詞。何と達變も沖の井が深き心は和田津海の。汐の八汐も打連れてオクリ伴ひ。へ一間へ入りにける。フシ跡先見廻し榮御前。政岡が傍にすり寄つて。詞年頃仕込みしそなたの願望。成就して嘸ぞ悦び。エ、何とおつしやる。ア、イヤモ隱すには及ばぬ。東西わかぬ内よりも。取替へ置きしそなたの子の。鶴喜代が身に恙なう。義綱の誠の悴。千松がこの最後。嘸ぞ本望であらうなう。エ、ヲ、取替へ子の樣子は先達て知つたれども。若しやと思ひ最前から。窺うて見る所。血筋の子の苦しみを。何ぼ氣强い親々でも。堪へらるるものぢやない。若殿にして置く我が子が大事。そなたの顏色變らぬは。取替へ子に相違は無い。スリヤ皆々心は同腹中。刑部殿とも内談しめ。諸事我が夫の指圖あらん。先づ今日は立歸り。病氣の樣子申上げん。必ず〳〵何事も。人に覺られまいぞやと。地一人呑込み悠々と。フシ館をさして歸らるゝ。地フシ跡には一人。政岡が奥口窺ひ〳〵て。地我が子の死骸抱き上げ。こたへ〳〵し悲しさを一度にわつと溜涙スエせき入りせき上げ歎きしが。詞コレ千松よう死んでくれた出かしたな〳〵。そなたが命捨てたゆゑ。邪智深い榮御前。取替へ子と思ひ遊へ。己れが工みを打明けしは。親子の者が忠心を。神や佛も憫みて。鶴喜代君の御武運を守らせ給ふか。ハ、、、、有難や。有難や。是と言ふのも此母が。常々教へて置いた事。稚心に聞分けて。手詰めに成つた毒害を。よう試みてたもつたなう。ヲ、出かしやつた〳〵。そなたの命は出羽奥州五十四郡の一家中。所存の臍を堅めさす誠に國の。フシ礎ぞや。地とは云ふものの可愛やな。君の御爲豫てより覺悟は極めて居ながらも。せめて人らしい者の手に懸つても死ぬ事か。素姓賤しい銀兵衛が女房づれの劍に掛り。なぶり殺しを現在に傍に見て居る母が氣はどの樣にあらうどうあらう。思ひ廻せば此程から。唄

うた唄に千松が。七つ八つから金山へ一年待てどもまだ見えぬ。二年待てどもまだ見えぬと。唄の中なる千松は待つかひあつて父母に顔をば見せる事もあらう。同じ名の付く千松の。そなたは百年待つたとて千年萬年待つたとて。何の便があろぞいの。三千世界に子を持つた親の心は皆一つ。子の可愛さに毒な物喰ふなと云うて叱るのに。毒と見えたら試みて。死んでくれいと云ふ樣な。胴慾非道な母親が又と一人あるものか。武士の種に生れたは果報か因果か。いぢらしや。死ぬるを忠義といふ事は何時の世からの習はしぞと。凝固まりし鐵石心。流石女の愚に返り人目無ければ伏し轉び死骸にひつしと。抱付き前後。不覺に歎きしは理。フシ過ぎて道理なり。地後にすつくと八汐が大聲。詞何もかも樣子は聞いた。こつちの工みの妨げ女。已れも生けては置かれぬと。地詞の一間押開けて。詞ヤア不忠不義の銀兵衛夫婦。工みの次第白狀せよと。地立出づる沖の井。詞ヤア此八汐に白狀とは。ヲヽ、其證人は爰に在ると。地云ひつゝ出づる顏見て悔り。詞ヤアそちは小卷。ヲヲ好い證人であらうがの。夫道益に云付けて。無理に毒藥調合させ。此事外へ洩らさうかと。よう夫を殺したな。夫の敵と思へども。女の身の討つ事叶はず。態と惡事に一味して。まつ斯う手めを上げよう爲。鶴喜代君と千松を。入替へ子と云うたも小卷。それ故に榮御前。うま〳〵此場を歸りしも。裏の裏行く七加減。サア眞直ぐに白狀と。地忠と不忠の喰ひ合せ。毒藥却つて藥と成る顏に似合ぬ配劑は。類ひ內儀の フシ手柄なり。地モウこれまでと八汐が懷劍。心得政岡請け流す。互に嗜む太刀さばき手を 三重カヽリ盡したる。フシ二人の女。地我が子の恨み一心に突込む懷劍打落し。直ぐに切込む八汐が肩先。ひるむを取つて突通され。虛空を摑んで悶き死。惡の報ひは フシ忽ちに心地よくこそ見えにけり。地手柄々々と沖の井小卷。共に悅ぶ折からに。物音人聲騷がしく。詞アノ人音は緣の下。油斷ならざる若君の御身の上も氣遣ひたり。ヤア腰元中燭々。地はつと答へも鈴々手燭。手んでに一腰長刀も閃めき渡る。緣の下。身は鐵石の節之助。寄りくる忍びを人礫。三重カヽリはら〳〵と フシ投げ散らす。地物の文色も暗紛れ。丈拔群の大鼠。口にくはへし系圖の一卷。飛鳥の如く駈行くを。透さぬ松ケ枝小柄の手裏劍。鼠の頭忽ちにばつと燃え立つ焰と共すつくと立つたる。異形の フシ姿。詞アヽラ不思議や。密かに宿直の緣の下。斯く取り圍みし曲者ばら。騷ぎに紛れ現れしは。群に勝れし大鼠。正しく忍びの幻術なる

か。ハ、ハ、怪しやナア。此一卷を聚はん爲。大願成就嬉しやなア。地聲は遙かに茵之助。曲者待てと聲より早く。はつしと打つたる以前の小柄。心得松ヶ枝忍びを柄。胸先血煙り曲者は跡を。暗まし三度出でて行く

第七

詞サア〳〵休め〳〵。おらが旦那明衡殿は。人遣ひが好いと聞き。跡の季から住んで見たが。此頃の忙しさ是では體が續かない。ヲ、それ〳〵。專内が云ふ通り。朝から晩まで働き通し。其上に京都から。上使とやら檢使とやら。今日此處へ來ゐと云うて。あの樣に幕打廻し。饗應ぢやの御馳走のと。酒や肴で交ぜかへす。殘らずあれを喰ふであろ。おいらはすぐちゃ空腹で。寒晒しの此尻を。明け六つに御戸帳開き。夜九つに閉帳して。著のみ著の儘轉りとやるは。はかない事では無いかいやい。コリヤ是非内が云ふ通り。中間の身の上程。打見には美々しくて。不便者の上は無し。さりながら悔むな〳〵。此身の上にも樂しみあり。最前幕へ運ぶ内。ちよろりと曲めたコレ此樽。三人寄つて呑まうぢやないか。是は出かした素早いやつ。肴などとは榮耀の沙汰と。地芝に。べつたり毛だらけな尻ッかたばみに押直り。地指いつ指されつ食べつ押

へつ呑む程に酒もよい程廻り口。江戸兵衛茶碗。下に置き。詞ア、何ぞ肴が欲しいなア。アノ幕の内にこそ肴はたんとあるらん。ソリヤ知れた事。此専内が運ぶ内。一々蓋は取つて見ねど。大方中は淺蜊の酢和。鮪の刺身きらずの煎上。鯆こはだを魚田にし。それから段々長じて來たら。湯豆腐などと奢るであらう。コリヤ〳〵江戸兵衛。汝は其様な料理をば。喰つた事はあるまいな。テモ扨も此奴はきつい下卑藏。喰物の事ばかりぬかし居る。忝くも此江戸兵衛。水道の水で育つた男。其様な卑劣な事は御存じ無いわい。コイツハ〳〵僭上をぬかすがな。江戸は江戸でも。大方裏屋の九尺店一つ竈に割鍋懸け此頃は米は高し。其日々々の小買ひであろ。コリヤヤイ〳〵。頃の動く儘。様々と人の店探しするがな。忝くも此男の。住みし所を云うて聞かそか。ドレ聞かうか。云ふぞよ。聞くぞよ。抑も此男の住みたる所は。淺草見附の邊りに於て。島屋といへる現金店。先づ其間口が五十間。奥行が五十五間。土藏作りに家を建て。ヤア藤井と書きし暖簾を掛け。番頭手代子供まで。六百人餘の人を遣ひ。ヤア。某は其中で。番頭殿か。イヤ飾焚殿ぢや。ほんに人の行末と。白水の流れ程知れぬものは無い。江戸の者が奥州三界。わい等と付合ふも他生の縁。イヤ又江戸の繁昌

が見せたいわい。先づ現金店と云ふ物はな。手代衆が二百人ばかり。抹香盛つた様にづらりと並ぶと。店に子供が立つて居て。お道入りなさいやせう。是へ〳〵。時に女中など來ると。お出でなされませ。今日は長閑にござります。此間の地合をも一度御覽じませ。エ、子供や。ヘノサ位の八丈替り縞。十四五反持つておちや。勘三御覽じたで御座りませう。羽左衛門もきつい評判でござります。エ、判取などとやらかすは。ハテさてそれは賑はしさうな事ぢやな。したが其勘三羽左衛門とは。どのお屋敷の御家老だ。エ、コイツハ生得田舍の芋掘りだ、コリヤ其勘三羽左衛門といふはな。日本一の歌舞妓芝居。イヤ又其繁昌が見せたいなア。役者と云ふものがたんとあつて。義經をする時は義經。金平は金平。傾城は傾城と。それ〳〵に分かる所が妙だわ。それをわい等に見せたいなア。ぢやが此様な遠國に生れては。それも一生得見ずに。地仕舞うであろと總々が スエカ、り打萎るれば道理々々。詞さりながら江戸中に生れても。屋敷方の奥女中。又町方の奉公人。芝居を見るは一年に漸と一度か二度。其様な人にはかの。聲色で堪能さすわ。なに聲色とは聞かない染色だな。エ、蒲色の事であろ。但は萠黄か花色か。ア、イヤ〳〵其様な事ぢや無い。今云うた役者の聲柄を。とつと其役者がそこへ出た様に似せるのぢや。おれも江戸に居た時は。其聲色を使ふ事が大名人。開手があるなら聞かしたいと。地口から出儘の フシ太平樂。地聞いて皆々擧り寄り。詞コレそれは何より面白かろ。芝居を見る事は成らずとも。せめて其蒲色とやら聲色とやらが聞きたいなア。どうぞ一口所望ぢやと。地せがみ立てられ今更に。知らぬとは云はれぬ時宜。高で向うは田舍者。知らぬを當に押强う。詞そんならわい等は彌々知らぬな。イヤ〳〵知らぬ。ほんに知らぬな。知らずばさらば遣つて聞かさう。併し聲色遣ふには。唄が無くては成らぬが。わいら唄つてくれないか。ハテ唄というても在郷者。臼引唄より何にも知らぬ。イヤ〳〵聲色の唄は文句が極つてある。ア、何とやらヲ、それ〳〵。雨の降る夜は一入ゆかし。この文句に何なりとも。節を付けて唄つてくれ。そんなら節は何でもよいな。唄雨の降る夜はナ。一しほゆかし。詞東西々々只今遣ひますが市川團十郎でござります。金ならたつた三百兩で。可愛い男を殺すか。アア金が欲しいなア。二八十六で文付けられて。二九の十八でつい其心ぢやわいなア。とつともうえらいもんぢやわいなア。ヨウ〳〵團十郎樣〳〵。ハ、團十郎は女

役ぢやな。今のは大方十七八な。娘になつた所と見えて。可愛らしい風俗までが。思ひ遣られて面白いわい。サア〳〵ま一つ所望ぢや〳〵。今度はかう金平か金時の様な。強い事がよかろ〳〵と。地請けのよいのに頭に乘つて。詞強い事ならヲヲそれ〳〵。そんなら瀬川菊之丞。こいつは又可愛らしい名ぢやが。若し菊之丞は女役ぢやないか。イヤ〳〵。江戸一番の敵役。丈の高さが六尺餘りで太り肉。たとへて見ようなら誰であらうぞ。ヲヽソレ〳〵。此國から出られた。丁度谷風と云ふ男。顏を眞赤に塗り散らし。橋懸からぐわたり〳〵と。イヤ聲色ばかりは面白ない。ついでに身振りもして見せう。おれが足を踏む度に。そこらの石を拾つて來て。今の樽でも叩いた〳〵。おつと合點と專内是非内。陰を打つ役ぐわたり〳〵。ぐわた〳〵〳〵。地まつこの如くと踏んばたかる。詞ヨウ〳〵菊之丞様〳〵。椎の木四五本小栁に取り。赤澤山の山千鳥。本尊かけたか掛け千鳥。とんびはとう鳥はかかア。變つたハレマ對面ぢやなアと。地何を云ふやらやくたいも。知らぬが佛總々がフシやつちや〳〵と褒めにける。地江戸兵衛ハツト心付き。詞かうしてべら〳〵遊んだら。また頭めが呵るであろ。尻の來ぬ内サア〳〵と。箒かたげて地銘々にオクリとばかはへ彼處へフシ急ぎ行く。地天さかる本フシカヽリ鄙とはいへど風俗は。都に恥ぢぬはげし地の。徒歩を拾うて象潟御前。娘文字摺伴うて。フシ乘物釣らせしづ〳〵と。とある木蔭に立休らひ。詞イヤなう文字摺。けふは御先祖秀衡様の御命日に相當れば。定倉殿廟參の筈なれど。公用繁き中なれば。夫に代つて自らが徒歩路を行くも君への恐れ。そなたを一所に伴ふも都より上使の御入り。御馳走役はそなたの夫。祝言はまだせねど許嫁の千賀之助殿。餘所ながら顏も見せたし。さりながら屋敷からは餘程の道。そなたも定めてしんどかろ。私よりは母様の。常からおひろひなされぬ道嘸ぞお疲れでござりませう。お使者儲けの此床几。ちとマアお休み遊ばしませと。地親子の中も武家は武家フシ堅い程尙可愛らし。詞コリヤ〳〵家來ども。暫く休息する間乘物はそこに置き。木蔭に休んで歸りを待て。地サア文字摺と傍へなる。フシ床几に休らふ程もなく。地京都よりの使者羽根川丹下。伊達千賀之助伴うてしづ〳〵と。出で來れば。それと見るより萩原藤治。二人が前に兩手を突き。詞先づ以て遠路の御光駕御苦勞千萬。拙者儀は定倉が家來萩原藤治。憚りながら一つのお願ひ。先祖秀衡の眼識を以て。主人定倉代々預る領地の内。今改

めて明衡殿の支配地に罷りなる事。主命默止しがたけれど。何とも拙者その意得ず。此儀遺恨の元とならば。終には兩家の不和と成つて。自らと忠義を忘るゝ道理。今一應了簡あつて。御割戻し下されかしと怨入つてぞ願ひける。ホウ萩原の願ひ尤も至極。定倉殿と親明衡。兩人遺恨を差挾まば鶴喜代君のお爲もいかゞ。コリヤ丹下殿御思案あつて。御割戻し遺はされまいか。成りませぬ。何事も皆此胸に。サ何にも云はずと控へてござれ。ヤイコリヤ若い者。此度の領地の事。主人鶴喜代の指圖ばかりと思ふか。忝くも梶原殿内意を以ての御仰せ。其方如きの知る事ならず。上使に向つて過言を吐くは。主人定倉の言付けならん。後日の禍りをヤ待つてをれと。地嵩にかゝれば此方はむつと。詞鶴喜代君の仰せとあらば。了簡の付くべき品もあらん。が先祖秀衡武功によつて。鏑先にて取つたる此國。他家の指圖を請くる樣な主人で無い。ヤア緩怠なり其頸骨。切下げてくれんずと。地切刃廻せばこなたも身構へ。既に斯うよと フシ見えければ。地彙潟中へ分け入つて 詞マア〳〵お待ち下さりませ。自らは定倉が妻彙潟と申す者。モ最前よりの家來が無禮。御立腹は御尤も。が慮外の段は幾重にも。御了簡下さらば忝う存じます。イヤなう藤治。御主人樣より我が夫に。數代預る領分なれど。モ他家へ上げるといふではなし同家中の明衡樣。殊に內緣ある家へ。お預けなさるを其樣に。マ何を爭ふ事がある。御寬じませ田舍武士と申す者は。面々が勝手ばかり。モ必ずお氣に障へられて下さりますなえ。コリヤ其方は此樣子。定倉殿へ早く申せ。イヤサコリヤ何事も此胸にナ。合點がいたか。サア〳〵早うに地是非なくも。主命何と詞さへ無念を。フシ堪へ立歸る。地跡打見やり。詞イヤ何彙潟殿とやら。其許は定倉の奧方とな。領分の狹められ嘸ぞ無念にござらうが。主命なれば是非ない事と。早く諦めさつしやるがよい。ヤコレ千賀之助殿。其許親父預り地の外。十分の棒杭打たせ。嘸ぞ大慶にござらうの。モ誰しもかやうの目出たい事。あやかる爲に幕の內で。お盃を頂戴致さう。ヤコレサモ兎角のいらへもさつしやれぬは。どうでござる。サ其許の御利分に成る事。刑部殿の差圖なれど。モ一つは拙者が働きを以て。サかやうに事を取計らふも。此國に澤山なる。カノエ、金花唉く陸奧の。ナ金花唉く御馳走に預らんと參つたに。不興の體は心得ず。が但しは使者を侮るのかと。地氣相變れば彙潟は。上使の前に差寄つて。詞お氣放じにお茶一つ。召上られて下さりませ。イヤ其許

の馳走は請けぬ。かつふつ構ひ召さるゝな。が心得ぬは千賀之助。餘人は知らず某へは。逆様に遣ひつくばひ。馳走答拜すべき筈。不快でござります。ヤ何とおいやる。サテ此四五日はきつう病氣が差發り。一向人事も分りませず。モそれ故私は一家の事なり。けふ御馳走の其役に頼まれました事なれば。モ何事も御遠慮なう仰付けられ下されよと。地この場の時宜をそれぞとも言はぬ色なる一包み。フシ上使の袖へ差入るれば。地ちやくと袂でしびいて見。俄に作る。ほや〳〵笑顔。詞ハ、、、、さてはさういふ事であつたか。それは近頃御苦勞千萬。が千賀殿も病氣とあれば養生が大事でござる。モ早く藥を用ひさつしやれ。が象潟殿が取持ちなさるれば。モウ其許は是にござるにも及ぶまいさ。身どもとても癇癪持。發りさうな其時は。かの今のナソレ。萬金丹か。金勝丸。金の字の付く妙藥を。給べると忽ち直ります。が是から幕の内へ參り。癇癪の養生ながら。御馳走に預りませう。それは何よりお嬉しい。イヤナウ文字摺。千賀之助殿のあの病氣も大抵では癒るまい。モそなたは近頃大儀ながら。跡に殘つて介抱頼む。が但しは母が殘らうか。アノマアかゝ様のおつしやる事。大儀な役を勤めるが。ちとなとお前へ私が孝行ヲ、それ〳〵。申しお使者様。マ孝行な娘ではござりませぬかいな。イヤハヤ神妙な事でござる。モあれなら娘御の御馳走でも。隨分とよからうが。モどう言うても若いだけ。今のナソレ萬金丹。金花咲く陸奥に。心が付かぬと我等が迷惑。若い者は若い同志。が象潟殿には御案内。然らば左様。斯うお入りと地塗り廻したる追從も。深き心の奥方は オクリ伴ひ〳〵幕へ フシ入りにけり。地千賀之助は默然と。スエテ思案取り〳〵後には。心もだ〳〵文字摺が。詞イヤ申し千賀之助様。お心悪いが定ならば。お背中でもさすりませうかえ。ヲ、緣なればこそ深切に。問うて下さる忝い。が只心得ぬは父の胸中。此頃はそなたの父。定倉殿とも中好からず。さすれば主人へ不忠の基。が但しは深い思召し。あつての事か何にもせよ。モどうも思案に落付かぬ。アレまだあんな餘所事に。紛らす様な事ばかり。地許嫁ばかりにていつ呼迎へなさるゝやら。ほんに出雲の神様へ。懸けた願ひの驗にて。思ふ殿御へ。嫁入りを今日よ明日よと待つ月日。短い冬の一日を。千年と思ふ心根を。ちつとは推量してたべと。娘心の一筋に思ひ積りし。フシ怨み泣き。地千賀之助も稲船のいなには非ず穂に出でて。靡く心の向うへ人音。詞アレ〳〵あそこへ親仁様。地ほんに私が心も知ら

ず悪い所へ明衡様。かういふ猥らな體見せたら直ぐに勘當請ける事。コリヤマアどうせう木隠れも七熊ならぬ乘物へ。小さうなつてフシ屈み居る。地伊達の治郎明衡廟參の下向道。幕際近く立止り。詞それなるは文字摺ならずや。京都の御使者は早やお入りか。倅千賀之助今朝より此所へ參り居る筈。が其方は知らずやと。地様子知つたか。知らぬのか。氣味悪さうに文字摺が。詞サア千賀様はたつた今まで。私と話しやなどするお方ぢやない。さうして常からお達者で。乘物は大嫌ひ。お屋敷にやなどござりませう。サ早くお歸り。なされませと地何を。フシ言ふやらしども無き。地幕の内より羽根川丹下。象潟御前伴ひ出で。詞ヤコレハ〳〵明衡殿先刻よりお待ち申す。が就いては其許領分の儀。拙者内外取りはからひ。十分の棒杭打ち漸う只今休息の所。嘸ぞ御滿悦でござらうの。ヤコレハ〳〵遠路と申し。御懇切の御計らひ身に取つていかばかり。某も今朝より早速參る筈の所。先君の廟所へ參詣。心外の不沙汰御宥免に預りたし。が則ち倅千賀之助。御使者設けの其爲に。アヽイヤ〳〵其儀はお構ひ御無用。象潟殿の御取持で。種々御馳走に罷りなる。ハテナ。饗應の役人に付置く倅は此場に無く。頼みもせぬに横合ひよりの取持ちだて。世には物好きな者もあるもの。ナウお使者と地どこやらに毒ある詞聞咎め。詞イヤ申し明衡様。其お詞は誰におつしやる。最前是に千賀之助殿。病氣の體に見えし故參りかゝつた氣の毒さ。お世話申すも一家の誼。ヤア其一家氣にくはぬ。心善からぬ定倉が。娘の縁を幸ひに我が倅を取込んで。收め賜はる領分を。割返させん其爲に。お使者の追從輕薄。其方の猿智慧か。但し定倉が言付けか。ヤ卑怯至極な追從侍。ヤア聞きにくし明衡殿。縁談は内證事。京都のお使者もござる前聞捨てにはなりがたし。定倉が領分は。先祖の鎧先鈍らぬ所。表裏を以て郡内を貪り掠める明衡殿。平たう言はゞマア國賊。斯く申すのが御無念ならば。お相手になりませうか。サア御返答地承はらんと懐刀抜きかけて。詰寄り詰寄る柳腰。傍にあぶ〳〵。フシカヽリ氣遣ふ娘。明衡は高笑ひ。詞ハヽヽヽ。ハテつべこべと喋つたりな。所詮女は相手にせぬ。御自慢なさるゝ御亭主に。泡を吹かせてお目に掛けん。がこれよりは屋敷へ歸り。不所存なる倅めを眞二つに打放し。内縁さつぱりと。切つて仕舞へば何處からも。手を入れられん氣遣ひなし。イザお使者には。お先へと地邊に屹度目を付けて。フシ屋敷へこそは立歸る。地行く間遲しと乘物より。飛んで出でた

る千賀之助。詞日頃には似ぬ父の詞。刑部貝田に荷擔して。お家を奪ふ工みよな。ヤ何にもせよ御意見をと。地駈行く氣相マア〳〵待つた千賀之助。詞今明衡の詞と言ひ若輩者の意見だて。聞入れぬのみならず却つて双にかゝりなば。サお主へ忠義はどの命で。マア急く所ではないわいなう。が今日の爲體。明衡殿の心に一物。所存あつてか敵へ一味か。善惡分かるそれ迄は。千賀之助をこつちへ人質。牢輿がはりの此乘物。娘の部屋へ押込めて日の目拜まぬ座敷牢。屏風の内の轉寶。夜もとつくりと寢さしはせぬ。さう心得て覺悟しや。イヤなう文字摺。假初ならぬ大事の人質そなたに番を言付ける。マ取逃さぬ樣相輿にと。地恥かしがるを手を取つて無理に。押込みヲ、ソレ〳〵。詞いつ駈出さうも知れぬ囚人。地肌と肌とを締め合うて。用心堅固に油斷せまいぞ。ヲ、マアノ嬉しさうな顏わいの。家來ども。乘物やれと地引添うて。歸るは粹の。水上や衣。川へと三重へ立歸る

第八

三下り唄萩の上風浮氣はいやよ。しめて寢る夜はナ下紐解いて。萩の下露わしや恥かしい ナホスフシ 武名は國に綻びぬ。衣川の館には泉の小治郎定倉。華麗を好まぬ奥座敷。庭は代々經るもとあらの木萩の花の返り咲き。時を違へし人心穩かならぬ冬の空。庭には主從三人が手々に竹〻帚目の。落葉枯葉を取捨てて打つ水玉に置く露もフシ紛へて。蟲とや見えぬらん。地主定倉機嫌好く。詞ヤ千賀之助。今日は其方が手傳ひで思ひの外早い仕舞ひ。嘸ぞ草臥であらう休息しやれ。ハアこれは痛み入つたるお詞。お前樣こそ嘸ぞお勞れ。モウ何事もお構ひなく。平に御休息なされませと。地勸めに定倉傍への床几。腰うち掛けて烟草盆。煙管取上げ薰らする。煙に憂さを吹きはらす。フシ花に餘念は無かりける。地飛石傳ひ。歩み來る。定倉の奥方象潟御前。跡に付添ふ文字摺御寮。年も二八の振りの袖心ばへなら器量なら京恥かしき品形。腰元はしたがとり〳〵に。小竹筒組重かず〳〵を床几のフシもとへ持てはこぶ。地奥方はしとやかに。詞御秘藏の花の返り咲き。いつも盛りの時分と違ひ。寒氣烈しき冬の空毎日々々庭へ下り。御持病でも發つてはと。文字摺に氣を付けられ九獻でも上げたいと。此子が手づから切り刻み。所變れば品とやら。お氣放じに酒一つ。お上りなされて下さりませと。會釋こぼるゝ挨拶に。詞ヲ、氣が付いて心遣ひ過分過分。花に心を移し居れば鬱氣もせず。結句土なぶりは身の養生。ナニ梅平は次へ

立つて休足せい。ナイ〳〵と地其儘部屋へフシ立つて行く。地定倉は打ちくつろぎイザ一獻と取上ぐる。娘が酌に一つ受け。詞此盃は千賀之助。そなたへ差さう。一つ呑みやれ。此頃自身庭の掃除を勤むるも。秀衡公寵愛ありし此萩。それ故庭を清くするも先君に仕へる心。時ならぬ返り咲きもお家の吉事を告ぐるならん。此もとあらの木萩に寄せ詠みたる歌は。ア、何とやら。娘そちや覺えずや。アイ成程その歌は。秋萩の古枝に咲ける花見れば。元の心は忘れざりけり。ヲ、いかにも〳〵。ある人萩は一年づつにして枯れ。若葉より花咲くを古枝に咲けると詠みしはと難ず。此萩草花にあらず木なり。地一名を唐萩といふ。依つて弓などに是を作る。詞武勇に長ぜし秀衡公寵愛ありしも尤も〳〵。地花の色も異木に勝り餘國に雙ぶ方なき名木。先君御秘藏のこの木萩。詞一年に二度の樂しみ。去年と今年を秋と冬。ハテ面白の眺めやと地酌みかはしたる盃の數々。オクリ廻ぐる年毎に。フシ斯くぞありたき風情なり。地父の機嫌に文字摺が。何か願ひのあり顏を。見て取る母がコレ文字摺。詞父上へ今の事ちやつと〳〵と敎へられ。地面映ゆげに手をつかへ。不義者と思召すもフシ恥かしけれども。地許嫁の千賀之助樣。一つ屋敷に居ながらもまだ祝言もせぬ殿御。父上のお情で。どうぞ今宵夫婦の盃。お許しなされて下さりませと。父には願ひ夫には聞け。聞けがしも戀のかぜ。胸の結ぼれもつれ糸たゞ一筋のフシ願ひなり。詞ホ、尤もなる願ひなれども其盃は追つての事と。言ふ其仔細は。明衡が此頃の行跡。刑部貝田に合體せしか。先つ頃より不和の中。彼が心底さぐり見て。悪說に極まらば其時こそ改めて明衡方へそちが興入り若し又悪事に與せしならば。冒ふまでもなく叶はぬ緣と諦めよと。地聞いてがつくり文字摺が。いつ果てしなき盃の。延びる思ひのスエテ遣瀨なさ涙隙なき。有樣に。地母象潟が引取りて。詞此頃上使設けの時。明衡樣の御機嫌損じ。それ故自らが伴うて此館に置く千賀之助殿。折を見合せ詫言は自らが心にある。其上父御が明衡樣にお逢ひなされたら。祝言もつい出來る。必ずきな〳〵思やんな。この國にて明衡定倉といへば羽翼の臣。代々忠義を忘れぬ家。明衡樣に限りよもやさういふお心の。イヤ〳〵與さうで無い。水は方圓の器に隨ふ。油斷ならざる此時節。移り易きは人心と。地詞の内に千賀之助定倉が傍に差寄つて。詞父明衡が胸中は定倉樣こそ能く御存じ。主君を忘れ非道に與し。同天は戴かず。地さりながら。如何なる天魔が魅入りにて。

逆徒の氣さしも候はゞ。一家同友の御誼み。御諫言なし下さらば生々世々の御厚恩と スエテ涙と共に。願ひける。詞ホ、切なる願ひ尤も〳〵。併し義に依つて一命は塵芥よりも猶輕し。君父に仕へる千賀之助。若し又明衡。君に弓引く心あらば。ハ、ア仰せまでも候はず。君の爲國の爲。父明衡を討つて捨て。腹かつさばき父諸共冥途の魁。ヤレ其詞が武士の誓言。ハテ遅しや健氣やと。地流石血筋の緣に連れ。千賀之助が心の中。思ひやつたる目に涙。見合す顏の一雫 フシ花も萎るゝばかりなり。地折柄下部が手をつかへ。詞錦戸鷲五郎樣御入りなりと知らすれば。ハテ心得ぬ。刑部が倅當國へ來りしとは。何にもせよ是へ通せ。象潟娘も次へ立ちやれと追立てやり。衣紋繕ひ。地フシ待つ間ほどなく。入り來る錦戸鷲五郎。都育ちと名にも似ぬ節くれ立ちし角前髪。疊障りも荒けなくさも横柄なる面構。上座に フシどつかと押直れば。地定倉は威儀繕ひ。詞ホ、珍らしや五郎殿。先づ以て遠路の所御苦勞千萬。御用の趣き承はらんと手を突けば。サレバ〳〵。拙者遙々と參る事餘の儀にあらず。當時都には奸佞の者多く。やゝともすれば主君を害し。家國を押領せんとの企て。愚父を始め貝田某。日夜を分たず寢食を忘れ。さるによつて間者を入れ聞きたる所。其逆徒の張本といふは。當國に在りと事明白たるによつて。貴殿と某申し合せ。國賊どもを搦め捕り一々に首を並べ。國家の歎きを鎭めん爲夜を日に繼いで參つたり。コレハ〳〵存じも寄らぬ大變。承つて驚き入る。シテ其反逆人とは何者でござるな。サレバサ。其逆徒といふは。貴殿と緣ある伊達の治郎明衡さ。承れば梶原殿の御意と僞り。貴殿の領地へ棒杭打たす。是などがかの俟人ばらと劃合つて。定倉殿。貴殿に一揆起させおのれ等が館へ引寄せ。手を出さずして討取る術。ナサ御合點が參つたかと 地同士討ちさする フシ底工み。地千賀之助つつと出で。詞ヤア聞きにくし鷲五郎。棒杭は君よりの御差圖。父明衡が反逆とは。慥かな證跡あつての事か。ハ、、、同し穴の子狐め。化の皮が顯れかゝるで。悶くわ〳〵。此鷲五郎を誰とか思ふ。當時肩を並ぶる者も無き。錦戸刑部が二番生え。女童が使のやうに。イヤサア其證據はなどと口を閉ぢて歸らうか。アノ爰な大馬鹿者めが。汝ごときの生白けたしやツ面で知る事でない。頃をたゝかずと其方の方へ片寄つて。ちよ〳〵こなつてござい。ちよ〳〵こなつてござい。イヤ定倉殿貴公へ見する物ありと。地懐中より一通を取出し。詞この一書披見召され。ム、松ケ枝節

之助殿伊達明衡。地ハテいぶかしと眉に皺。披き見るより悔りし。詞明衡妹政岡と心を合せ。鶴喜代君を毒殺に及ぶべし。定倉事は。某存ずる旨あれば宜しく事を計らはん。コリヤこれ明衡自筆の狀。ホイ。何と御覽じたか。身動きならぬ此一通。ちよつと小口がこんな物さ。とても遁れぬ明衡親子。可愛や命が宿腐つたか。ヤモ面を見るも穢らはしいと。地飽くまで惡言嘲弄に。たまりかねて千賀之助。腹に据ゑかね。詞ヤア詞が過ぎる。察する所汝等親子。貝田勘解由が工みにて。父を科に落さん爲な。我が推量に違ひはせじ。地イデ逆徒ばら一々に面縛させんと立上れば。ヤア何處へ〳〵。詞案外なる素野郎め。某親子を反逆とは。圖ない事を帝出したな。其はしやいだ頤骨を。切り下げてくれんずと鍔打鳴らしつつ立てば。ヲ、さう言ふ汝をと地鯉口くつろげ。詰寄り詰寄る血氣と勇氣。フシ既に斯うよと見えたりける。地定倉押しとめ。詞五郎殿お控へなされ千賀之助も控へてをれ。明衡が科明白の上は君の上意を頂に戴き。討取るに何の手間隙。今兩人刄傷に及び此事世上に流布あらば。國の騷ぎ大方ならず。事落居するまでは千賀之助は此方へ人質。最早籠中の鳥同然。五郎殿には大切なる討手の役目。何事もお構ひなく奥の一間で御休足。御酒一獻召上られよ。コレハ〳〵某も長途の勞れ。然らば奥にて御馳走に預らん。コリヤ千賀之助。此世に居るも暫しが内。頼み寺へ人でも遣り。似合うた樣に念佛でも唱へて待つて居れ。ヤ定倉殿御案内と。地慾惡不道の犬侍。力み詰寄る千賀之助。押へる定倉鷲五郎フシ打連れ一間へ入りにけり。地フシ風かあらぬが。萩の本そよと物音忍びの姿。邊りを窺ひコハリ〳〵足。出合ひ頭に栂平が見るとも知らず曲者は。奥を指して駈入るを。詞ヤア忍び入るは何者ぢやと聲掛けられ。地振返つて物をも言はず。斬つて懸るをかい潜り。刀手繰つて擔投げ。拍子に落つる一通を疾くより後に定倉が。拾ひ取る間に栂平が。何の苦も無く曲者を縛しフシ上げてぞ引据ゑたり。地定倉封じ押開き。詞何々其方今日屋敷へ忍び入り。小治郎定倉討取りなば。當座の褒美として。金子三百兩遣はすもの也。猶恩賞は功に依るべし。伊達の治郎明衡判。ム、さすればいよ〳〵彼が惡心。根深くも工んだりな。出かした栂平。下郎に似合はぬいい奴〳〵。今日より後日末長く。武士に取立て使つてくれん。ハツ〳〵〳〵有難く存じ奉る。此上ながら何時々々までも。お目掛けられて下されうなら。添う存じまうすでごはりまうすると地フシ悦び勇む折こそあれ。

詞明衡樣御出で。ハテ合點の行かぬ。斯くも仕込みし今日の時宜。此頃不和なる我が屋敷へ。明衡來るは仔細ぞあらん。栂平曲者取通すなと引立てさせ オクリ 座席をへ改め待ち居たる。 フシ 早や程もなく。 地 伊達の治郎明衡。家に杖突く年ばいや腰に梓の弓取の。張と意地との岩乘作り。袴のひだも角菱ある不和なる中の中敷居 フシ 目禮ばかりつと通る。 地 定倉も一揖し。珍らしゝ明衡殿。いつぞやより何となく。中絶致せし某が屋敷。思ひ寄らぬ只今の入來。サ仔細ぞあらん。ホホ成程。伊達泉の兩家は。誠に車の兩輪の如く。何れを何れと甲乙なく。國の政治を預る兩人。水魚の如くあるべきを。何故に忍びを入れ。某を討たんとは謀りしぞや。證據は忍びが所持の一通。貴殿よりの賴みの狀。 地 コレ見られよと投げいだす。定倉取上げ打ちまもり。 詞 ハ、ハ、年老いぬれば麒麟も駑馬。流石に名を得し明衡も。刃金が背へ廻りしな。其方の工みを仕損じ。詮方なさの破れに。先づ其方から白狀召され。ヤア舌長し小治郎定倉。某に白狀とはナ、何を以て。アイヤ鶴喜代君を亡き者にせんと。種々の工みを我能く知る。最前召捕る曲者が。懷中の狀の文體。人知れず定倉を害せん工みの證據の一通。 地 披見せよと以前の狀。差出せばとつくと見。 詞 ハテ工んだり拵へたり。似せ筆を以て某を。謀らんとは愚か〳〵。遺恨あらば武士らしう名乘手とするは。刀の穢と思へども。イザ立上つて勝負々々。ホ、何事も露顯すれば。所詮叶はぬ死物狂ひ。狂人同然の明衡なれども。望みに任せイザ勝負。サア。サア。サア〳〵と 地 互に鯉口ちつとも赦さぬ。氣配り目配り。とくより此方に立聞く象潟。心を冷す氷の刄。一度にきらめく電光石火。かつしと合うたる刃先と刃先。胸の鎬はこぼるゝ如く。勇士と勇士の フシ 一世の晴業 地 打掛ひらりと白刃の刄。 詞 マア〳〵待つた定倉殿。明衡樣もマア待つてと。 地 我が身をしづにどつさりと。二人も尻居にどつかと坐し。 詞 ヤア武士と武士との爭ひを。女童の知る事ならず。ヲ、サ奥方留立てして怪我召さるゝなと引取る刀。マア〳〵まあ言ふ事を聞いてたべ。女童とおつしやれども。先程からのお二人の爭ひ。互に證據はありながら。それと分らぬ其内に。打果しなされては。兩家共に滅亡し。先祖へ對して御不孝と言ひ。主君へは不忠不義。マア〳〵とつくりと御思案と。 地 詞立派に武家育ち。合す刄に打つ非太刀。流石 フシ 泉が。妻なりし。 地 二人も顏を見合して。 詞 ム、實にも〳〵。負うた子に教

へられ淺瀬を渡ると譬の如く。今兩人が打果せば。家の斷絶先祖へ不孝。しかし汝が工みの次第。屹度詮議するまでは。傍を離れぬ定倉と。地納むる刀明衡が。フシ膝元へ投出せば。地此方も同じく刀を鞘。詞ホ、明衡が魂も定倉に付添うて。汝が底意白狀まで。互に離れぬ詮議役。ヲヲ明衡が魂は定倉が惣度張り番。定倉が魂は明衡が屹度糺明。後程迄に。サ仕上げを見よと。詞のせつば詮議の鍔際。國に日貫の兩家老ヂクリ別るゝ一間象潟も。暫し休まる胸の中フシ連れて奥へと入りにける。地様子窺ひ鷲五郎。出づる庭先差足抜足。邊りを見廻し以前の忍び。共に木蔭を奴の栂平。詞鷲五様郎。シィ聲が高い。親刑部殿の計ひにて。伊達泉兩人を。同士討させんと忍びの計略。闘をはづさず爰までは仕畢せたが。成程〳〵疾くより入込むこの栂平。又國に殘る一味の面々。いよ〳〵二心なき血判。コレ此一卷にと差出せば。ホ、出來かした〳〵併し。この連判を明衡定倉に見付けられては事むつかし。コリヤ〳〵汝は是を親人へ。右の様子物語れ。必ず人に見咎められな早く。地早くに曲者は。肌にしつかと納むる一卷。詞然らば拙者は是より直ぐ。ヲ、サ〳〵早や急げ。ナニ栂平は跡に殘り。某諸共何かの手番ひ。地早や行けとフシ奥と。表へ別れ行く。隔つ親子の。仕切りの襖。明けても明かぬ明衡が。跡に附添ふ千賀之助。父が前に差寄つて。詞先程より申す如く。貝田と縁ある親人故。主君に背く氣さしありと。證據を以て鷲五郎が。定倉殿へ讒言は。却つて彼等親子が工み。親人と定倉殿。互に疑念を生ぜさせ。一虎濱えに乘ぜん爲とは思へども。地日頃に變り利慾に迷ひし境論。何かの様子思ひ合せば。若しや眞の不忠にやと。現在血筋の某さへ。疑ふ心の出づるもの。詞今匿々の人心。他人の疑ひ尤も至極。地お心を打明けて定倉殿と心を合せ。お家に逆ふ惡人ばら一々に糺明し。忠臣の名を上げてたべと詞を盡し理を盡し孝と忠との一筋にスエ涙は。血筋の誠なる。地明衡は返答なく。諸手を組んだる。フシこなたの一間。地障子開いて小治郎定倉。詞ナニ文字摺。最前よりそちが願ひは。勘當をしてくれいとな。女の身に似合はぬ望み。サ様子は何とと尋ねられ。地涙ながらに顔を上げ。姫御前の身のあられぬお願ひ嘸ぞや憎しと思召す。不孝の罪も辨へぬは。親と〳〵との言ひ約束。祝言せねど殿御ぢやと。樂しんで居るものを。詞思はぬ今日の爭ひ故。夫婦の縁も是切りに。なつたら私や何とせう。どうしようぞいな〳〵。地思ひ切られぬ胸の内。いつそ勘當請けたな

ら不和な中でも武士の。義理も意氣地もあるまいと無理な思案も千賀様に。添ひたいばかりの私が願ひ。人と思召されずと犬畜生と思ひ切り。願ひを叶へて給はれと。おぼこ育ちのあやもなく。ッシ譯もなみだにくれ居たる。地千賀之助は父の顏。やゝ打守り恨めしげに。詞いか程に申しても。御返答もなされぬは。お心に一物あるか。忠義には親をも討つ。誠お家に仇ならば。親子の緣をさつぱりと。お切りなされて下されい。不孝には似たれども。不所存なる父上と。一つで無い主君へ盲譯。先祖への我が忠義。サアさつぱりと勘當との。お詞願ひ奉ると。地口には言へど心には。子として親へ不孝の惡口。勿體なや恐しやと胸へッシせきくる血の涙押へ。かねたる風情なり。地治郎明衛聲あらゝげ。詞ヤア若輩者の言はれぬ諫言。親に勘當してくれとは。他人となつて某に。またも諫めを入れん爲か。但し許嫁の文字摺に。心迷うて其願ひか。何にもせよ親に向ひ。慮外は我に弓引く同然。幸ひ飾るこの弓矢日當の的は襤の繪。雪持つ松の下り枝。一矢に射當てば望みの通り。勘當をしてくれんと。地投出す弓矢定倉も。詞ヤイ文字摺。一旦組んだる夫婦の緣親に換ゆるは女の操。とは言ひながら只一人の我が血筋。捨てるか捨てぬは正八幡の敎へに任す此弓矢。的は襤の松の枝。射當てばそちが望みの勘當。早く〳〵と地親々が互に詞かはらぬ願ひ。はつと一度に取上ぐる。親子別れを爭ふ一矢。弓矢神の冥慮にも。盡き果てたるか悲しやと。思へば共に手も震ひ。日當もくるひ引き絞る。弓弦を傳ふ露涙。睨ひ固めて文字摺が放す手の内はづるゝ矢先。鋭き羽ひゞき千賀之助。目當違はぬ松の枝。射當つる矢先我が胸も。碎くるばかり親と子の緣の切れ目と思ふにぞ弓投捨てて。ッシどうと坐し誓し詞も無かりける。地明衛は勇みの顏色。詞勝負の一矢に射勝ちし上は。京都へ赴く伊達明衛勘當せし千賀之助。行末賴む小治郎殿と。地詞に文字摺千賀之助思ひがけなくッシ驚く二人。詞ホ、年月の本望達し嘸ぞ御滿足察し入る。改め言ふには及ばねども。刑部を始め貝田直勝。徒黨を拵へ鶴喜代君を害せんとする此時節。貴殿某兩人の内京都へ立越え。台聽に達し事を糺さんと思へども。今諸士の別當たる梶原平三景時は。錦戸刑部に内緣あれば。此度の決談は地獄の上の一足飛び。生きては歸らぬ此役儀。勘むべき貴殿と某互に忠義を爭ひしが。死ぬるも跡に留まるも忠義の決著せん爲に。倅どもが弓矢の勝負射勝ちし方が都へ出立。命を的の對決も星をはづさぬ忠臣は。武運に叶ひし。

明衡殿。地ホ、お義しう存ずると。詞に明衡殿爾と打笑み。詞貴殿と某兩人が。心を堅むることを知らば敵心を許さずして。短兵急に我が君を。殺害せんも計られず。敵よりの術に乘り。不和なる體になしたるも。事を延する互ひの計略。最前取交したる一腰は。死ぬるも生きるも兩人が忠義を一つにせん計略。又邪智深き鷲五郎。いよ〳〵不和に見せかけて。事の樣子を刑部貝田へ告げ知さらせんと我が計らひ。地武士の身の上は人界へ生るるより。君に捧げる身體髮膚。時日を移さず都に登り。佞人ばらを悉く罪を糺して立歸らんさりながら。詞老少不定の世の習ひ。父が顏をも能く見置き都へ登りし其跡は。定倉殿を親と頼み萬事の差圖に隨ひて。文字摺と中好く添ひ。子孫の榮えを忘るゝな。地又母とても無い千賀之助。御不便頼む小冶郎殿と。忠義に撓まぬ武士も。流石恩愛捨てがたき。身節に應へ千賀之助。文字摺も正體なく歎けば共に定倉も。親子の心フシ思ひやり。忍び涙にくれ居たる。地襖ぐわらりと錦戸五郎。詞ヤア始終の樣子とつくと聞く。此上は汝等が息の根留めんと懐中より。地取出す錢丸庭の面。投げると其まゝ燃え立つ狼煙。俱に盛りの萩の花。一度に散つて散亂せり。合圖に駈來る以前の曲者。フシ庭先に突つ立つたり。地五郎聲かけ。狼煙を合圖に味方の軍兵。取懸けたるか何と〳〵。されば候術の如く。狼煙を合圖に寄掛けんと。待ちに待つたる刑部が軍兵。定倉殿の下知によつて。こなたに仕掛けし焙烙火矢。切つて放せば一騎も殘らず微塵に碎けて皆殺し。此上は其方一人。最早最期に間はない。尋常に觀念せよ。汝が忍びと頼みし我は。熊川源五兵衛秀景逆意一味の連判狀。最前我が手に入りし上は。親子諸共逆磔。覺悟々々と呼はつたり。詞ヤア扨はおのれは熊川よな。斯くまで仕込みし我が大望。汝ら如きが術に乘り。裏かゝれしか殘念やナア。せめてもの腹癒せに。某が豫て仕掛けし地雷火にて。俱に冥途の供させん。覺悟ひろげと言はせも立てず。ヤア愚か〳〵。地中に陽氣ある故に。時ならぬ萩の返り咲。正しく敵の工みにて。地雷の仕掛と測り知り。熊川に言ひ含め。衣川の水上を堰き入れたる故にこそ。地中に籠りし陽氣を失ひ。アレ見よ花は枯れ萎む。草木心無しと申せども。お家の凶事を告げ知らしむ。凡人ならぬ秀衡公の惠みの程の有難さ。先君御寵愛のこの名木。今より後は此花を。先代萩と名付くべしと。地詞は實にも大國の。花も實もあるフシ宮城野に。今もその名は世に高し。地鷲五郎は死物狂ひ。定倉目がけ斬付くるを。か

い潜つてもぎ取る刀其儘 フシはつしと。首打落し。詞鷲五郎を討取る上は。兩家の疑念も晴れ渡る。此上は二人の子供。婚禮を取結ばん。ヤア〳〵象潟。取り取へず銚子々々。地アイといらへて象潟御前。心ばかりの祝儀のまなび。三方土器取持つて。二人が フシ前に並ぶれば。地明衡頭打振つて。詞源五兵衛の忠節にて。慥かの證跡出る上は。晝夜を分かず都へ上り。悪人輩をとり拉がん。倅ごときの小事にかゝはり。暫時の延引暫時の不忠。フシ早やお暇と立出づる。地定倉暫しと押止め。詞忠心一途の御老人。逸り給ふは理ながら。過半刑部に一味の中。一人參會ある事。氣遣ふ儀にあらねども。地恐るゝに徳ありとかや必ず〳〵油斷なく。詞ヲヽ尤もなる御示し。錦戸刑部は取るに足らず。貝田直勝梶原が。威勢を假りて忠節を。覆ひ隱す術ありとも我亦。義心を表に立て。地誠を以て押す時は神國の奇特などやなからん。詞若しやかの地に變あらば。若君を竊に守護し間道より馳せ歸らん事。十日の外出まじきぞ。其間の籠城を堅固に頼む定倉殿。ホヽ其儀はちつとも氣遣ひあるな。本城に立籠り種々の計略諸卒を勵まし。地寄せ來る敵を追立て〳〵暫時も足は留めさせじ。ヲヽ潔よき御詞。詞千賀之助も其時は一方を賜はつて。破竹のごとき堅陣なりとも。義を金鐵に切つて入り。地井の字巴の字に薙ぎ立て〳〵。野白になつたる敵兵ども追詰め。〳〵。追散し。武術の程を試みん。詞ホヽ勇ましゝ〳〵。此熊川も立籠らば。敵の首をば二三百。珠數繋ぎにしてくれんもの。近頃殘念さりながら。寄手に武功の者あつて。思ひがけなく城外に勢を伏せ置き不意を討たば。ヲヲそれこそは傳へ聞く。野に伏勢ある時は。歸鴈連を亂すとかや。地まつ此通りと松が枝に。打込む手裏劍栂平が。フシ眞逆樣に無惨の最期。詞ヲヽ天晴々々。手の内と言ひ智謀の程。末頼母もしき千賀之助。心置きなくはや出足。ホヽ然らばお暇。地再會は。フシ頼みがたなき夢の世や。思ひ數書く文字揭が。せめて一日宮仕へ泣いて見送る象潟が。互の心思ひ遣りこぼるゝ涙。押包む。忠義の誠を顯はす時節。かゝる目出度き出立に涙は不吉と堅張り上げ。謡兵者の交り頼みある中の酒宴かな。詞ハヽハヽハヽ、、、、。地笑ふは武士の別れの涙忠臣。三重なりける

第九

詞サア〳〵何と〳〵。主人鶴喜代幼少にて家督相續仕るに付き。信夫庄司。錦戸刑部。兩人後見仰せ付けられしを國許の

老臣ども。不快に存じ罷りある上某儀。京都在府に極められ。家中の仕置仕るゆゑ。高木風に憎まるゝの讐へ。倩夫の庄司病死以後。鉾戸刑部と私二人。政治專らに取計らひ罷り在るゆゑ。爾餘の輩。その誤りあらん事を心掛け。越度あらんにのみ目を付け。耳を傾け窺はゞ。數年の間何ぞ一兩度の誤り無き事やあらん。勿論毒殺に及び。家を奪はんと一味徒黨を催せしなんど。ゆめ〳〵覺悟仕らぬ儀。然る所鬼忽の訴へ。コリヤ明衡が偏執邪推。憚りながら此儀御賢察下さるべし。聊か左樣の企てせん事。地天の冥罰恐ろしと。辯舌巧みに フシ述べければ。地梶原顏色快然と。調貝田勘解由が申す條一々に理に當れりア、明衡贔屓の人あらば嘸ぞ赤面を致されん。地ハ、、、、と嘲弄に。調ホ、梶原殿の詞とも覺えず。忝くも公の政道を承り。理非明白を決斷し。親疎依估贔屓に拘はらざるを面々聽分の心得。邪を糺す役人として身に邪を行ひ。或は時の權威に誇りて己れに諂ふ者を助け。己れに疎き者を罪に落す。若しも左樣の者あらば是ぞ誠の大罪人。誰にもせよ。どなたにもあれ。急ぎ召取り首討つて。獄門の木に曝すこそ。政道の本意ならんと。地詔ひ飾らぬ其勇氣。凜々たるに肝拉がれ。調成程々々。左樣々々。重忠殿には氣象人。尤も至極に存ずると。地座興の體に フシ紛らせば。地明衡謹しんで頭を下げ。調貝田勘解由が逆罪の儀は。先達て訴へ奉る通り。當鶴喜代に限らず。凡そ十ケ年以來の存じ立て。其故は若き主人は常々に諫言を加へてさへ。我儘さし起り申す事なるに。却つて近習の者どもに申し含め。頻りに婬酒を勸め。奇妙院と申すを賴み。下駄に呪詛の文を書かせ。益々放埒に本心を取亂させるの類ひ。擧げて數へるに暇なし。仰ぎ願はくは。台命の憐愍なし下され。御糺明願ひ奉ると恐れ入つて訴へれば。梶原聲かけ。コリヤ〳〵勘解由。明衡が申す所一一に相違なきや。其方が返答に依つて存ずる旨あり。定めて覺悟あることならんと。地心を付くれば貝田はひれ伏し。調冠者太郎の近臣の內不身持知らず者あるゆゑ。刑部私申し合せ。度々諫言仕る節は。毎度異議なく得心致し。私など出席の砌は。酒宴遊興の沙汰皆て無く後々に承れば法外なる事ども御座あるよし。據なく國許へ申し遣はし。一門ども罷り上り。義綱を隱居致させしは老臣ども皆承知の所。私一人の所爲と申し出づる明衡が所存心得がたし。コリヤ〳〵貝田暫く待て。汝事を左右に寄せ言譯立つると思へども爾餘の儀は未だ知らず。最前より廿餘ケ條。悉く其方が罪。其職に居て其

事を怠るは大罪にあらざるや。ハヽ御意恐れ入り奉る。しかし。過分の役儀に付き用事繁多に相勤め罷りあれば。義綱の放埒惰弱實夜傍にこれなき故存ぜぬ事は力及ばず。ヤア詞多し貝田直勝。汝富貴那の辯を振ひ。役人どもを言ひ掠めんと思ふや。譬へば其方。主人の家に大切なる重寶あつて。汝が方へ預くる時。盗賊の爲に奪ひ取られ。イヤ某は存じ申さず盗賊の業なりと。油斷の言譯立つべきか。サ其方何と心得居る。若き主人を預る事器財の類の輕きにあらず。往古周公旦成王を補佐し給ひ。清和の朝に良房の趣き人臣たる者の鑑たり。義綱の心亂れ。行跡正しからざるは預り人の罪誰にか讓らん。返答いかに直勝と。地水を流せる詞の楯板。暗きを照らす明察は フシ實に日本の固めなり。地貝田は猶も進み出で。詞ハヽ御意恐れ多く候へども暫くお扣へ下さるべし。明衡に答ふべき儀あり。家の大事を訴ふるに御身一人引請け。爾餘の面々は一向知らざる體。これ不審の第一なり。謀書を作り侯人を集め。某を無實の罪に沈めんと計るは。如何なる遺恨あつての儀なるや。これ不審の二つなり。又諸士の面々何心も無きに。汝一人詞を企て。台聽に達し奉る事。これ不審の第三つなり。言譯ありや明衡と。地フシ居丈高に詰めかくれば。地こなたも膝を立て直し。詞汝辯を巧みにして專らに非を飾れど。何ぞ明衡を言ひ掠めんや。某一人事を預るは深き意味ある所にて。其方如きが知る事ならずと。地言ひも果てぬ梶原聲かけ。詞ヤイ〳〵明衡そりや暗い。只今貝田が等ぬる所一つとして返答に及ばず。意味ある事と後日に延し。我が方に理ある事を只今急に言ひ立つるは。コリヤこれ汝身勝手過ぎる。貝田一人に申すと心得しか。忝くも決斷所に於て。諸役人を蔑ろにしたる申し分。甚だ以て奇怪なりと氣色損じて見えければ。ハア、御意恐れ入り奉る。併しながら。國許の面面一列に申上ぐべき事なれども。一味徒黨の後難を恐れ。私一人事を預り申上げ奉る。近年國許へ申遣す仕置等。道ならぬ事ども少なからず。心得がたく存ずれども何時の下知何れの指圖にも梶原樣の仰せ。景時樣の御内意と申越さゞるは是なく。當時一天下の間に於て。梶原樣の御意とあれば。迅雷の如く恐入り奉る儀。刑部貝田が非道を訴へ申す時は。憚りながら梶原樣の貴命を背くに相似たり。さるに依つて。コリヤ〳〵明衡。委細の樣子詳かなり。さりながら。梶原殿に限り左樣の非道あらん樣なし。殊に景時殿は專ら歌人の聞えあり。正直の心を種とする詠歌。ナその歌詠の梶原殿。よも邪に

與し給はん。但し覺えばし御座あるや。何の〳〵。左様の事予が知る所にあらんや。定めてそれは侯人どもが。此梶原が威勢を借り。諸人を靡かす謀り事某は存ぜぬ事。左様なくては叶はぬ所コリヤコレ刑部貝田が工みならん。明白に白狀せよ。ハア御意恐入り奉る。併しながら我我が謀計とは。何を以ての御仰せ。ヲヽ其證人は是に在りと。貴人高位の恐れもなく。明衡が前にむずと坐す。詞ムヽ珍らしゝ浮世渡平。シテ其方が證人とは。こりや明衡と言合せ。某を罪に落さん工みならん忝くも御大名の方々。歴々御座の其中へ其方如きの出席は上へ對して恐れあり。且つ鶴喜代が後難ともならん。其處立去れと地白眼付くる。ちつとも臆せずくつ〳〵と吹き出し。詞今に變らぬ立派の口上併し某出るからは大言の吐く其頃骨迫付け踏み裂いて地くれんずと事も。無げなる一言に。緩怠なり浮世渡平。詞某が工みとは何ぞ慥かな證跡ありや。ヤア盗人たけ〴〵しいと。俗語の如く其爭ひも今の內。某疾くより入込みしを。熊川とも源吾とも得知らぬ阿房ども。隙を窺ひ奪ひ取りし此一卷に汝を始め一家中も大半は刑部に一味の連判狀。最早遁るる方はなし。それへ參つて繩掛けようか。但し言譯の筋あるか。サアそれは。サア〳〵〳〵〳〵どうぢやと地退引ならぬ證跡に。さしもの貝田も口ごもり返答。フシしどろに控へ居る。地庄司重忠威儀繕ひ。詞ナニ梶原殿是にて事は落着せり。さりながら。證據となるべき其の一卷改めずんば叶ふまじ。許す是へ持參せよ。地ハツと明衡頓首して。フシ御前へ差出せば。詞景時殿イザ御披見。イヤサ〳〵何の是しき見るに及ばず。其儘に捨て置かれよ。イヽヤイヤ左にあらず。鶴喜代一家の納りは此一卷の中に在り。侯人どもに哆しも驚され。梶原殿も一味なされ。其許の御姓名此中にあらんことを。恐れて披見なされぬか。サアそれはよもや左様の事あるまじ。然らば一所に見ませうと。地兩人立合ひ紐とく〳〵。貝田は一生懸命と面色はやゝ土の如く。明衡熊川兩人の胸の疊りを吹き拂ふ。冷風さつと押開く。中には一字一點なく重忠は唯不審顔。景時怒りの聲荒らげ。詞汝等兩人。此所を遊所遊山の座席と思ふや。忝くも京都の決斷事を猥りに取計らひ。白紙を以て證跡とは上を恐れぬ大罪人。謀書を拵へ詞を工み貝田を科に落さん爲明衡一人の所存にあらず。みな鶴喜代の指圖ならん覺悟せよ汝等と。地一卷取つて投げ付くれば。兩人驚き立寄つて披き見れば。詞コリヤ白紙。明衡殿。源五兵衛。ハア○地間毎々々の結構は實にも執事の奥座敷。

上段の間に座をしめて。テレイキヤン。インテレイヒ。コウキヤン。テビイルヒイル。コハリと唱ふる仙家の祕密文。鼎に注ぐ潔淨水。棘の黒髪振亂し天に向つて渴仰し。明衡貝田が對決に。落著すべきかの一卷。唐土盧江の水を取つて。是なる鼎の中に湛へ。洗ひ落して白紙となせしも。奥羽二國を覆へし。ナホス先祖國香の修羅の妄執。散ぜん事は今此時。アラ〳〵心地よや嬉しやと襖に響くフシうなり聲。地疾くより親ふ外記左衛門親ひ寄つて眞二つと。打込む刀曲者は。又と唱ふる祕文につれ。次第々々に手もすくみ思はず知らず取直し。我と我が手に數ケ所の疵。夢の直路の如くにて。よろぼふ足を踏みしめ〳〵。爰ぞと斬込む刀は反り。眞向二つに血は滴り。鼎の中へ入るより早く陰陽激して忽ちに逆卷く水氣燃え立つ炎。折よく松ケ枝節之助。さしもに重き大鼎片手に差上げ差し付くれば。血汐の穢れ嫌ふと見え背ける曲者早速の松ケ枝。姿に影の添ふ如くちり〻〳〵と付け廻せばフシうんとのつけに倒れ伏す。詞ハテ不思議や先つ頃下家に忍ぶ君を守護する其折から。鼠と化して系圖の一卷。奪ひ取つて立退く曲者。何にもせよお家の系圖此方へ奪ひ返さんと。地立寄る松ケ枝曲者は。むつくと起きて。詞シヤ竪子。汝いかなる强盛なりとも。我又。大望九丹金液經の法を行ひ。雲を起し。雨を呼び。須彌山を抜き芥子に隱れ。自在を得たる我が幻術。汝も下界の鬼となさん。テレイキマン。インテレイヒ。カウキマン。テビイルヒイル。地と責めかけ〳〵唱ふれども更に奇瑞の見えざれば。節之助希代の思ひ。詞扨は外記左衛門が無念の精血。血汐の穢れに汝が仙術。忽ち失せしは天の責。我が君を守らせ給ふ氏神の御加護ならん。ハア有難や悦ばしや。サア此上は系圖の一卷。早く渡せ。假令仙術失せたりとも。汝等如きに渡さんや。速かにそこ立去れ。こま言いはずと早く渡せ

ヤア〳〵明衡。其方筋無き事を申し。某を科に落さんと謀書を拵へ。剩へ證據なんどと差上げし其一卷。白紙を以て上を欺く。汝ばかりの科にあらず。主人鶴喜代越度となつて家の斷絶今此時。地覺悟せよ明衡と鍔打叩いてフシ詰めかくれば。地源五兵衛むくりを煮やし。詞正しく館を出づるまで紛ふかたなき連判狀。今白紙となつたるも汝が胸に深き工み。地イデ糺さんと立ちかゝる。明衡暫しと押し止め。事にはやるは尤もなれども。今荒氣を出しては鶴喜代君のお爲にならぬ。ちやと申して。先づ〳〵待たれよ。何事も此胸に先づ。先づ次へ立たれよと。地老臣

の詞是非なくもしを〳〵 フシ 次へ立つて行く。 地 梶原聲かけヤア〳〵者ども。 詞 鶴喜代始め一家の奴ばら。悉く縄を掛け。獄屋へ引け。アイヤ先づ待たれよ梶原殿。貝田勘解由も暫く扣へよ。ヤイ明衡證據となるべき一卷の白紙となりしと言ふも偽り。貝田を科に落さん爲汝一人が工みであらう。左樣なければ鶴喜代も筋なき事を台聽に達し。上を恐れぬ科遁れず。其方一人落命せば。主人の身の上別條なし。天誠を照らし給へば死後に汚名は自然と雪がん。とくと思案を廻らし召され。ハツ今に始めぬ重忠樣の御厚情。粉骨碎身仕るとも報じ難き御示し。斯くなる上は何をか包まん。貝田勘解由に職を超えられ。我が威勢を奪はれし其無念止む時なく。斯くまで仕込みし大望も。時至らねば悔みて返らず。此上の御願ひ。切腹御赦免下さらば。ヲ、神妙の詞至極せり。其儀は梶原さし赦す。早く支度を仕れ。ハツ有難く存じ奉る。跡々の儀は重忠樣。ホ、心置きなく最期を清う。ハ、ハツト 地 お請も明衡が。無念の涙押隱し。心靜に手を合せ。南無松島大明神弓矢神正八幡。奥州五十四郡を照し給はゞ。鶴喜代の御武運長久。我こそ武運拙くとも。死後には冥寶明らけく。是非潔白を神國の印を顯し給へやと。祈念の内に貝田聲かけ。 詞 ヤア明衡。切腹とは武士の冥加。傍輩のよしみ某介錯してくれん。ヲ、過分々々。腹十文字に搔切つて。イザと聲をかくるまで必ず早まり介錯すなと。 地 無念の一言身も震はれ 詞 エ、天惡人に與せずとは偽りなるか。エ、奇怪や。たとへ骸は死するとも。魂君の影身に添ひ。侯人輩に目に物見せんと。 地 肩衣はね退け坐を組んで。差添に諸手を掛け。 フシ 既に斯うよと見えたる所へ。 詞 暫く待つた明衡殿。松ケ枝節之助是に在り。貴人出席の其中へ陪臣の參會御免に預ると。 地 一卷片手に フシ 立出づれば。貝田聲かけ尾鰭千萬。 地 既に以て事極つた裁許をもどくは恐れ多し。早や立去れと 地 極め付くれば。から〳〵と打笑ひ。 詞 汝が手足と賴んだる常陸之助國雄を殺し。家の系圖奪ひ返す。又砂川の屋敷にて。傾城高雄平產の姫君。義綱公諸共に害せんとする汝が間者。此方へ召し捕つてうぬらが工みの底叩かす。最早遁れぬ覺悟々々。ヤア舌長なり節之助。既に以て明衡が差上げたる連判狀一字一點なき白紙。是即ち慥かな證據。ヲ、其一卷こそ仔細あり。國雄が幻術蹇く上は印ぞあらん明衡殿。 地 實にもと傍なる一卷を。開けば姓名あり〳〵と元の如くに鮮なり。明衡貝田をはつたと白眼み。 詞 禽獸に等しき汝讀み聞かすに及ばねど。重ねて詞を出さぬや

う。恁とそれにて承れ。此度冠者太郎義綱。幷に子息鶴喜代丸。退け且つ害せいと謀る事。則ち成就せば一味連判の輩は。其功の輙重に應じ。恩賞高祿宛行ふもの也。錦戸刑部太郎國純直勝とまで 地讃まぬ内二つになつて倒れ伏す。血刀引提げ飛鳥の如く奥の一間へ駈込めば。續いて松ケ枝節之助 フシ遁さじものと追うて入る。 地梶原俄にあわて出し。 詞貝田めが死物狂ひ殊に松ケ枝無法者。彼奴があれ出したらば我等はお座にたまられず。コレ〳〵武勇自慢の重忠殿。組留めてたべ 地頼み入ると膝もがた〳〵 フシ震ひゐる。 地重忠は脇目もふらず。 詞驚き入りし貝田が手の内。伊達次郎明衡が帶する所の刀諸共。速かに斬放せしは天晴名作。是こそは先達て紛失せしと略聞きたる。亂れ髪の一腰ならん。貝田が工み明白に現はるゝ其上に。家の重寶出づる事。鶴喜代の運目出たき所と。 地劍戟を振る其中に座席崩さず悠々として坐しゐたる。寛仁大度ぞ フシ見事なり。 地次の一間は鍔音刃音手に取る如く聞ゆれば。梶原猶も尻据らず。 詞アレ〳〵爰へ來るさうな。コリヤどう致さう重忠殿。コハ仰々し梶原殿。何の是しき仔細なし。終日の對決に拙者殆ど疲れ申す。氣を養ふは斯樣の時。足下の手前で薄茶一服。一服やら立腹やら。切腹しようも知れぬ時宜。薄茶どころであらばこそ。折節風呂に火の氣は無し。爐の炭もつぎかへずほんの是が冷火燵。 地緩りとおあたりなされよと。尻に帆掛けて走り船梶原 フシはふ〳〵逃げ出づる。 地貝田を中に熊川松ケ枝。いづれ劣らぬ早業は目覺しかりける 三曳次第なり。 地熊川は瀟手を負ひ。貝田を足下に節之助とゞめをぐつと刺通せば。庄司重忠喜悦の眉。 詞ヲヽ出かしたり〳〵。貝田が帶せし一腰は亂れ髪の一腰ならん。系圖の一卷家の重寶かく一時に手に入る上は。錦戸刑部は遠流させ。家の榮えは萬々歳と。 地仰せに兩人勇み立ち祝ひ壽く池の龜千代の榮えを鶴喜代の。威勢は朝日の登るが如く實に神國の人心。賴もしゝともなか〳〵に申す。ばかりは無かりける

天明五年巳正月　作者　松貫四　高橋武兵衛　吉田角丸